



霧と幻

— 軽井沢にて，夏 —

著者 M. C. フレーザー

訳者 瀧澤 恵美子

鱗形屋

霧と幻

— 軽井沢にて，夏 —

著者 M. C. フレーザー

訳者 瀧澤 恵美子

鱗形屋

はじめに

ここに収めた便りは、私が一公使の妻として東京で暮らし、1889年から1892年の間に書いたものです。書くにあたっては、その時その時の興味と気分に従っただけで、これといった作法などにもありません。それに歴史とか慣習とか哲学とか、日本のことを細かく描写しようとも思いませんでした。外国人の誰もがこの島国で同じ景色を眺め、同じようなきまりきった見方で人々の生活をとらえ、ガイドの中途半端な説明に満足していた時代には、この「おもちゃの国」、その「妖精のような」住人のことをさも知ったふうに軽々しく、書きたてるのは簡単だったし、嘆かわしいことに、それが流行でさえあったのです。そんな時代はもう終わりました。

日本はその神秘への扉をわずかながら開きました。日本を知る第一歩を踏み出すことができようという今、私たちは自分がいかに無知であるかに気づくのです。この国に長期間滞在できる特権が与えられ、その間ど

こへどのくらい旅行しようが自由という、私のような立場の人間には、多くの側面をもつ複雑な国民性がしだいにわかりかけてきます。人なつっこいかと思うと妙に遠慮深い。強さを内に秘めていて、権威を誇らしげにみせびらかしたりはしない、というようなことが。

私が書いたのは、主に東京での生活の様々な側面とそれに関連したできごとや人々のことです。いうまでもなく、私たちはほとんどの時間を東京で過ごしたのですし、東京こそ、今日の日本の活気を中心だからです。ほかには、訪ねたことのある場所についてだけ書きました。特に避暑に行った山岳地のこと。今では山道のひとつひとつが、子供のころに遊んだ庭のように、なつかしい、大好きなものになってしまいました。

中部の山々の眺めはとて言葉では言い尽くせないくらい、それは雄大なものです。花咲き乱れる草原から目もくらむような断崖に立つと、眼下に見はらせる世界は、太古の自然の力がそのまま動きを止めてしまったかのよう。あるいは、レンガを高く積み上げておいては、それがくずれるのがおもしろくて、一気にくずす、そんな子供の遊びのレンガのように、塔や城壁や寺院や宮

殿のある都がくずれ去って足もとに広がっているかのよう。

日本の風景は画集でも見ているように思えることがあります。霧が晴れて、いつか美しい景色が見えたと思うと、また霧に包まれてしまう。そうしてページをめくられると、今しがた、入江に日がふり注ぎ、小さな島々のふところに百合の花がゆれていた、あれはほんとうに見えたものかしら、という気がするのです。振り返ってみると、やはり深い霧。それでも目に映った景色——あれは真実、そしてこの霧は……幻。

この小冊子もひとつの記録、そして感謝のしるしにしようと思います。健康状態がおもわしくなかったり、仕事に縛られたりして、あまり長い旅行はできませんでしたが、数は少ないながら、心の赴くままに訪れた土地のことを知ろうと、辛抱強く誠意を尽くしたつもりです。また、いつみれば、周りの雰囲気は私自身だんだんと同化してしまつたような気がします。そのことで、これが案内書でもなければ歴史の書でもなく、ただ私が見たり聞いたりをこと書き写し、ひいては今日の日本に対する英国の理解と共感を少しでも呼ぶことにあればと思つただけ、そのささやかな努力のあらわれでしかないと思つただけ。

いうことも許されるのではないかと思うのです。

書きつづってきた便りも、1894年初夏、突然、筆をおくことになりました。1894年——私は故国へ帰ってきました、ひとり身となって。深い悲しみの闇の中に明るく輝く一点——それは、記憶が消えない限り、二つの故国、ヨーロッパと日本の多くの友人たちの友情と思いやりを忘れない限り、輝きつづけるでしょう。その思いやりは深く、悲しみは半分になり、その友情はあつく、私をかつての故国へ結びとめる強いきずなともなれと、今も二つの海を越えてここまで伝わってきます。

なつかしい人たち、なつかしい、やさしい友たち——このふるさとの地からもうひとつのふるさとへ、もう一度心をこめて、ほんとうにありがとう。

M.C. フレーザー

1898年12月 英国トーリントンにて

霧と幻

もくじ

軽井沢は夏まだ浅く.....	1890年7月伊香保.....	9
なつかしい思い出を胸に.....	7月軽井沢.....	31
7月は朝もすてきですが.....	7月軽井沢.....	49
これはためになると思う本は全部.....	8月軽井沢.....	69
最初の台風からちょうど8日目.....	9月軽井沢.....	91
この「平安の館」は.....	1891年8月軽井沢.....	109

1890年7月 伊香保

軽井沢は夏まだ浅く、伊香保で2週間ほど過ごそうとやって来ました。東京の暑さと湿気には堪えられなくなつたからです。ここもかなり雨が降るので湿気はあります。雨の切れ間には、山腹に冷たい霧がうっすらとかかり、服にもまつわりつき、私たちが泊っている村松旅館の部屋の中にまで漂ってきます。夫はすぐに東京を離れることができず、私は一足先に友人とやってきたのです。女ふたりがこの雲の中の宿りにたどり着くまでの道中は、それはたいへんな冒険でした。

日本にはまだあいまいな、これはこうとほきりしないことがたくさんありますが、距離の測り方もそのひとつです。荷物を背負って歩き疲れた旅人に次の町までどれくらいかと尋ねると、

「たいふありますよ。どうみても5里はある」

という返事。今度は、茶店で休んだばかりで、おほかも

いっほい、という元気な若者に、

「伊香保まで、ほんとうに5里もあるのでしょうか」

と聞いてみると、そのしんぼりした声に若者は大笑いして答えるのです。

「5里だって！ とんでもない。せいせい1里半くらいのものですよ。」

こういうことにはいたってそっけない私たちのような外国人は、とまどってしまうばかりです。距離を測るのに（そしてもちろんそれが当然ではあるのですが）、自分の感情もちこんだりしないのが私たちです。

たまたまこんなことになりました。友人と私はお昼近く、気持ちよく東京を出発しました。汽車に乗ること4時間、それから苦もなく山道に行くこと4時間（と聞いていました）、夕暮時には伊香保に到着、食事をして、黄昏時を縁側で過ごし、そのあとには満月——となるはずでした。これまで、この北部の鉄道には乗ったことがなかったのに、今回の汽車の旅は初めての経験でした。客車は他の線よりもはるかに乗り心地がよく、長官である英国人の方の御配慮で、車内に小さなかわいい茶卓が用意され、おかげで、短い行程なのに少なく

とも3回はお茶を楽しむことができました。

前橋に着くまで、景色はわりと単調でしたが、いたるところ夏のさわやかさが溢れていました。沿線の小さな駅は、絵に描いたようにきれいで、どの駅でもきまって、お百姓さんや子供や車夫が、大きな門に身をのり出すように群がって、この驚くべきおもちゃに見入っていました。汽車が煙をはきながら、この静かな村をはじめと通った時に、まさるとも劣らぬほどの興味をそそられているようです。

前橋で汽車を降り、焼けつくような暑さをのがれて、まずは涼しい茶店に落ち着きました。先の列車で着いていた萩田が、いつものように人力車やかごかきを集める手はずを整えている間、足止めをくうのもかえってうれしいくらいでした。でも、かごかきを見つけるには、ずいぶん捜し回った上、その下も握らせなければなりませんでした。このあたりでは、かごはとても珍しいのです。私のかごは萩田と同じ列車で着いていました。かごに乗って10分と経たないうちに、人力車にしなかったことが悔やまれました。当然のことですが、かごをかつぐ歩調のとり方を知らなかったし、数分おきに右肩、左肩と、かつぎなおすのです。

お松と萩田が宿屋の主人と何やら深刻な話をしていたのは気がついていました。あとでわかったことですが、二人ともこのあたりは始めてだったので、伊香保までの道のりを尋ねていたのです。返事がおもわしくなかったもので、これは、宿屋の主人が、ずいぶん遠いところについて、その晩は前橋に泊らせようとしているのだと思ひ、このことについては私に何も言う必要はないと判断したのでした。それで私たちは出発し、ほこりっほい道を走り、焼けつくような平地を越えていったのです。

時はどんどん過ぎてゆくのに、伊香保の山々はいつまでたってもはるかかなたに見えるのです。もうくたくたに疲れ、おなかもぺこぺこでした。何か手違いがあつて、萩田が朝、重い荷物を送る時に、昼のおべんとうも一緒に送ってしまったのです。沿道の茶店で、お茶とはっか菓子も口にするだけで、他には何も食べることができませんでした。

やがて小雨が降り出した時には、ほんとうにほっとしました。が、それも束の間、ありがたと思う間もなく、今度は土砂降り。それに日は暮れるので、とうとう茶店に車を寄せました。茶店の黄色いちょうちんと千

ラチラ揺れるかがり火は、背後にそそり立つ山々の黒い影の中にくっきりと、心やすらぐ光を投げていました。車夫は疲れきっていたし、みんなびしょぬれだったので、少し休もうと足を止めたのでした。気の毒に、車夫たちのゆらじは泥んこ、全部脱ぎすててしまいました。そして茶店の少し低くつたところにあかあかと燃えている火のそばへ這っていきました。それは身分の低い旅人が自由に休み、暖をとることのできる場所です。

ねえさん(女中さんのことをみんなこう呼びます)があつあつあうどんのどんぶりを運んできました。その中に入っていたのでしょう。だいこんのがまんはらなひあゝ臭い、あれさえなかつたら、私たちだって喜んでごちそうになつたものを。だいこんはもともと、腐つたような、いやな臭いがします。それを日本人は漬け物にして、長い間貯蔵して、ますますひどくするので。すると、食べられるころには、刺激性の強い、ものすごい味になるので、たとえばリンバーガーチーズが航海中の危険信号になると思われているように、だいこんにだって、そういう使いみちがあつていいかもしれません。

前に1度、(おそらくぶしつけに)日本の殿方にはどう

して日本人はこんなひどい味をおいしいと思うのかと尋ねたことがあります。答えて言うには、

「われわれのスティルトンチーズといたところでしょうな。」

実際、この辺でとれる主な食料品といたら、米とかうどんとか豆とか、味の濃いものばかり、おまけに、命をつなぐためにはそういうものをかなりたくさん食べなくてはなりません。量を食べるには、安くて、味の濃い漬け物が絶対不可欠なのです。

たぶん、たいこんにせきたてられたのでしょう。臭いが家のすみすみまでしみこんでいるようでしたから、萩田が浮かぬ顔をしてやって来て、土地の人の話だと、伊香保まで行くのに、夜、この土砂降りでは、3時間かかると言った時、それでも出発するほうがまだましだと思いました。荷物も、口に合う食べ物もなく、しかもたいこんと一緒にここにいるよりは。そして、しぶしぶながらも出発したのでした。伊香保までそんなにかかるなんて何かのまちがいであってくれたらいいのに、とはかたい望みを抱いて。

山が深くなるにつれて、ますます暗くなり、ちょうちんの濡れた明りでかろうじて連れの車がどこにいるのか、

ときたま見えるだけでした。この時は、急いで行くために人力車に乗り換えていました。私の乗っていたかごを最後に見たとき、かごは村の道にぽつんと置いてありましたが、中にかごかきの一人が乗りこんで、いつも私がしていた恰好をまねようとしていました。片手でもう一方の腕をつかんで、うしろに寄りかかるのです。その恰好のまま、パイプをふかそうとしていました。かごの中には雨がひどく降りこんでいたのですから、そんなにいい気分ではなかったはずですが、でも一日中肩に重くのしかかっていたかごに、今は自分が座っているのだから雨はなんてなんのその、きっとそんなふうに感じていたのです。

その晩は、何だか気味の悪い旅をしました。雨にけむる中、人気のない荒地を越えてゆくのですから。道は2~3メートル先くらいまでしか見えません。車夫たちはひどいぬかるみ——道などとはとても言えたものではありません——を勇敢に、ぐちもこぼさず、しかも一番ひどいところでは軽い冗談さえとぼしながら進んでゆきました。この気の毒な車夫たちの、元気で、勇敢な姿を見たら、私たちの難儀などはまだ序の口で不平を言ったりするのは恥ずかしいことだと、誰しも思うでしょう。

この奇妙な体験に興味もそそられていた私は、疲れも、夜の雨の冷たささえも感じませんでした。

雨に洗われた山々の巨大な連なり、そして深々とした谷がちょうど見えるくらいの明るさでした。谷間からはもくもくと白い雲がわき、まるで目をさました幽霊さながら、うしろの山々をなめるように昇り、目の前に迫る暗闇の中へ私たちを追いやろうとしますのです。雨が小降りになったかと思うと突然、大きな白い星が私の方へ、ゆっくりと空から降りてくるのが見えました。ふわふわと、目の前に近づいてきたとき、ようやく、それはほたるだということがわかりました。こんな晩にさまよい出て何をしていたのかは見当もつきませんけれど。

車夫たちは時折、休憩するために人力車を土手ぎわに寄せました。かじ棒に吊したちょうちんの明りがまわるい輪を描いて、ぼんやりとあたりを照らし、近くのものみんなぐっしょりと濡れている様を見せていました。車夫が人力車で風をよけてパイプに火をつけようとする。一瞬、霧の中をすっと流れるきざみタバコの煙に、心がなごみます。

さあ、また出発。数分も経つと、先を行く人たちが坂

を登りきったところで、少しだけ見える空を背にして、大きく、のしかかってくるように見えました。あの雲のかげには、満月が輝いていたはずなのに。

やっと、遠くに明りが見えました。やがて、小さな地の精のような人たちがそろそろと、大きなちょうちんと番がさをたずさえてやってくると、すぐそばでぺこぺこおじぎもして、

「村松、村松」

と何度も何度も繰り返すのです。自分たちがその宿の者だということも告げるためです。最後のひとふんばりで、車夫は、もみの枝から雫がおちる道を引っぱり上げてくれました。その道があまり急なので、木が建物の横にまで伸びてきたのかも知れません。とうとう着きました。気持のいい玄関。赤いちょうちんと、人々の笑顔。ぐしょぬれの外套から這い出すようにそっと脱ぐと、からだじゅうが固くて、痛くて、やっと屋根の下に入ることでできた喜びはひとしおでした。

畳の匂いのする部屋、ひたたり閉められた雨戸、どんなに雨が打ちつけようと、もう平気！ 言うよりも先に、萩田と召使いたちは気をきかせて、乾いたものの荷をほどき、

濡れたものを片付けると、すてきな お膳を 並べました。明るいうらなと花は、私たちを 元気つけようとの 心づかい。それに、一日の 飢えを 忘れるようにと、食事とお酒。なんだか、おとぎの国に 入りこんだよう。みよりのない少女が一人だと、山にぽっかりと 穴があき、親切な地の精たちが 暖かい土の中の家で もてなしてくれる。その時の少女のような 気分でした。

この宿の部屋からの 眺めは、かなり有名なのです。翌朝、女中さんが そと縁に出て 雨戸を、一晩中、雨を 防いでくれた、あのやさしい雨戸を 開けてくれるとすぐ、私も 起き出して、外を 眺めました。でも残念ながら 今朝も 雨。下に見える 広い谷も、その向うの 壮大な 日光の山なみも、灰色の雨に けむって ただ ぼんやりと、影のように 見える だけでした。

そうは いても、だから 美しく なかった というのでは ありません。無彩色で あったがために、山々の姿は より 壮麗に見えました。雨は いったん 小降りになったかと思うと また 激しくなり、まっすぐに 降っていたかと思うと、一陣の風おもてにあおられて 谷を 這い、涙に ぬれた 自然の女神の面に、たえず 表情の動きを 添えるのです。こういう表

情は、陽の光が 金色に 降り注ぐときには、決して 見ることは できません。

雨も 峠を 越え、いつかしら、あの美しい霧に 変り、そのために 空の様子が みるみる 移ってゆくのです。移るにつれて ますます この世のものとも 思えぬ様子を 呈してゆきます。これでは 雨を 恨むこと ほど できるはずが ありません。ひさしのある縁に 出て、濡れた土の匂いも かいでいると、ときどき 思い出したように 雨つぶが ほおに 当る。そうしていると、私の 思いは ほんかに 遠く、あの 乾いた土地へと 戻って ゆきます——

カンパーニヤの 平野予、8月には あずき色に 焼け、あまりの 熱さに 素手では 触れることが できない土地。千里、夏も 盛りになるころには、木という木が ひからびて しまう。10ヵ月も かんばつが 続き、冷たい雨で いやされるころには、国土は あえぎながら ほこりに 埋もれて しまう。それから、「砂と 荒廃と 黄金の地」と 呼ばれる 中国の 町。生まれた子は 雨の 洗礼を受け ないまま、1歳に なる。そこで 宿に していた 寺の 近く、日に 焼けて 乾いた 丘に 座って、平地の かなた、北京の方を よく 眺めた ものでした。そして 目を ふせると、暑さで 死にかけている 英国

人の赤ん坊の顔。その子の母親に言ったことがありました。たっけ。

「元氣を出しなさい。今夜、雨が降りさえしたら、この子は生きられる。ほら、南の方に雲があるわ！」

その晩、雨が降り、小さな命は救われました。翌年の日照りて絶えるまでの短い命でしたけれど。いとしい雨！きょうの私はおまえを恨みに思ったりしない。文字どおり夏の熱氣を和らげてくれるやさしい雨——神さま、ありがとうございます。でももっと感謝しなければならぬのは、私たちの心にとって あれは不安の黒雲、苦しみの涙——そのおかげで、繁栄という名のまひるの暑さに乾ききり、こげついてしまわないうられるのだということです。

こんなことを考えていると、連れれの友人が傍に立ち、言いました。

「ほら、少し明るくなってきたわ。見物にでかけましょうよ。」

そこで連れだって、この妙な具合に台地にまたがった町へとでかけました。この町は山の斜面にぴったりにくっついていて、中心街は階段状の急な坂道になっています。その道から横丁がさかなの骨のように分かれ、湯浴客が泊っている小さな旅館がたくさん立ち並んでいます。伊香保

には温泉(46℃)が出るからです。

この温泉はずっと昔から、多くの病気をなおすのに利用されてきていますが、今でもたくさんの方がやってくるのです。町並は温泉が湧いているところをぐるっとおおうような形につくられています。温泉はこの火山地帯にたくさん湧き出ています。熱くて勢いのいいものあれば、ぬるくて弱いものもあります。標高750メートル、緑なす山腹から熱いお湯が噴き出すので、この小さな町はそれに順応しなければならなかったのです。

階段の続く長い通りには、いっふう変わった店が並び、のぼりがはためく。道が切れるあたりからはもっと急な階段が、町のずっと上の方へ伸びています。その頂上には小さな寺があり、石のベンチが置いてあるので、腰をおろして、高原の谷間の向うに広がる巨大な山々を見はるかすことができるのです。寺には奉納された石どうろうと、これも奉納物、とはいっても石どうろうほど長もちはしません、旗がたくさん立っています。階段の下には、小さな花壇があって、一面、あやめの花が満開でした。見ていると、急に日が射して、白や青や紫の花が、向うの森から山すそを回ってさわやかに、心地よく

吹いてくる風の中で、いっせいにその葉を振り広げたのです。

風が 私たちの行く手を指しているようだったので、少し休んでから寺を出て、右手の深い峡谷の方へ続いている道をたどりました。川が丸石の上をごうごうと音を立てて流れています。このあたりの水は鉄分が多いのでさび色をしており、水に触れるものはすべてくすんだ黄色に染まってしまいます。峡谷のあたりは木がうっそうと生い茂っているので、横を歩いていても、流れはたまにしか見えませんが、流れの音だけが、川がそこにあるのだということを告げています。

ゆっくりと、私たちは山々の緑のふところに入ってゆきました。上を見れば深々とした森が道の上までおおいかぶさっているし、下を見れば切り立った崖、その底には、急流が黄色く染まった石の上を文字どおり煮ええぎって、熱いしぶきをあげ、湯気をたてて流れています。そして流れていって山峡の大きな水車を回すのです。普通なら、冷たい水の流れがするところですが。

道を登りきると、何もかもひっそりとして静かで、思いがけず小さなほころに行きあたりでしたが、それも、なにか

自然なことにも思われました。ほころには仏さまが笑みを浮かべて座っておられ、まわりには数えきれないほど、お碗や鉢などの奉納物、それと仏さまにつき従うように並んだ小さな仏像。その仏さまを見て、私は思わず息をのみました。仏さまが私の目をじっと見て、やさしくほほえみかけ、そこに座ったままおじぎをして、親しげに挨拶をしたのです。

ほころと見えたのは、ただの小さな陶器のお店だったので。清潔でひそやかで、お金もうけとは縁遠いように見うけられました。仏さまと思われた人は、その場から動きもしないのに、私はこの上なく美しい青い茶碗をつい買ってしまいました。その茶碗に7銭払いましたが、この生き仏さまは、まるで私がそのほころに7円も喜捨したかのような、満足げな様子でした。

この店の裏手から、道は急に険しくなっていました。私たちは立ちつくしたまま、さわさわとささやいている緑のこずえのアーチ、そのアーチを破って、白いあじさいが、ところどころ日だまりのできた道の上には、ゆらゆらとみごとな花を咲かせているのを見ていました。

道のはずれに宿屋があって、その風呂に湯治客が

集まっていた。そこで石のように固くなった木とか、石でできた茶碗をきれいにみがいて売っていました。ここでは竹のかけひも木の枝や藤のつる、あるいはその他手近なもので支えて、網の目のようにはりめぐらしてあります。かけひは谷を下って、それぞれの宿に鉱水を送り込むのです。その流れには綿布のきれはしが浸してあります。水中の鉄分を含んで黄色に変色したら取り出して、^{ちからあび}力帯として利用するのです。この帯は非常に重宝がられています。

帰り道、途中にある店にはことごとく立ち寄ったに違いないという気がします。ある店で、伊香保の綿ちりめんを1反買いました。織り目のあらい重い生地で、地は鮮やかな赤みがかった黄色です。これこそまさに流れの中の鉄に染まった石の色、光が当たっている時のあの色と全く同じです。これを織った人はあの流れを心に描いていたのでしょう。ちりめんの長さいっぱい、対照的な青と白でぶつかりあう波と雲の間を、不屈の精神のシンボルである鯉が何百匹も元気よく、流れに抗して泳いでいるのを見ればわかることです。全体を眺めると、その大胆な色

づかいに息がつまりそうになります。ですから、積み重ねられた藤細工のかごのくすんだ緑色を見ると、ほっとします。黄昏時の森の色を編みこんだような色合いといたらいいでしょうか。

それから、陶器なら、どんな種類のものでも、どんな用途のものでも揃っています。ただ、色だけはどれもこれもほとんど同じ——そう、やはり伊香保の色、日の光に輝く鉄錆び色なのです。こういう微妙な調和を見いだすことには何とも言いようのない喜びが感じられます。

微妙な調和などと言っても、今だに自然のひざもと近くにいる人々には当たり前なことなのでしょう。でも私たちのような、子供のころの教えをその後の味けな生活で忘れてしまった者は、何かの折に、偶然触れることがあるだけなのです。買った物ひとつをみても、日本人の目には私は野蛮人と映るのだということがわかりました。みやげ品を10個余り買って帰り、小さな居間の畳の上に全部一緒に並べたら、ひとつひとつが何の関係もなくて、萩田とお松は、納得がいかないというような顔をしていましたから。

また別のときに伊香保を散策しましたが、今度は道を山とは反対の方へ降りて行ってみました。どきどきするようなことがたくさんありました。

坂を降りてゆくと、まず奇妙な一団に出会いました。小さな女の子が、私たちの方に背をむけて、道のまん中にじっと立っています。髪は肩までふさふさと垂れ、ふっくらした小さなからだには水色のきもの、片手にはやはり水色の茶びんを下げています。茶びんはつるのところでぶらぶらと揺れていました。見たところ、お酒かお湯を持ってこいと言いつかってきたにちがいありません。小さなはだしの足は根がはえてしまったようで、声もたてず恐怖に震えて、真正面に立ちはたかるおそろしい獣の顔をじっと見ているのでした。

獣というのは黄色い(もちろんこれも伊香保の色)雑種の犬で、耳をぴんと立て、前足をうんと伸ばして、顔を女の子の顔と同じ高さに構えているのです。その表情はことばよりも巧みにこう言っているようでした。

「よしよし、俺さまはこわいぞ。この道は俺さまのなわばりだ。おまえなんかの来るようなところではない。まあ、今度だけは食わずにおいてやってもいい。あれ! なんだあ

のおそろしい生き物は?」

私たちの姿を一目見るなり、ひと声長く吠えろと、おそろしい犬は向うへ逃げていってしまいました。女の子は茶びんをしっかり握って、道の端ぎりぎりのところまであとずさりして行くと、哀しそうに私たちを見上げました。まるで、

「ほら、犬だってあたしのことを食べなかった。あなたもあたしを食べないで!」

と言っているみたいだ。

そこで、私たちはこの子を安心させるために、足ばやに立ち去りました。そして、もっとおもしろい光景に出くわしたのでした。道のすぐそばに扉のない小さなお湯屋があって、そこから湯気と一緒におしゃべりの声も流れてきました。中には、せいせい!メートル四方くらいの湯ふねに、村の女の人が3人、お湯の上には頭だけ出しておしゃべりのまっ最中でした。湯ふねのへりのところに脱ぎ捨てた着物の中に赤ん坊がいて、自分もお湯につかろうと必死にもがいていました。

言うまでもなく、私たちを見ようと、彼女たちの頭はいっせいにこちらを向きました。2人はかえるみたいだ。

お湯から跳び出して、湯ぶねのふちに座って私たちの身なりをとやかに言いあっていました。その時の自分たちの身なりのことはたなに上げて。そしてまたお湯の中に跳びこみました。その中の1人が家へ帰るところをあとで見かけましたが、着物はほとんど片方の腕にかかえて、もう一方の腕で赤ん坊をかかえていました。日本の風習にはとてもあけっぴろげなところがあります。

さらに行くと、矢場がありました。店の主人は1度投げてみなさいと、ひどく熱心でした。私たちはそれよりも、おかしい灰色の猿の方に興味をひかれていました。猿は、日本の猫と同じでしっぽがなく、自分と全く同じ灰緑色の岩の前で、つないである縄が許す限り、跳び回っていました。猿も私たちを異国の怪物かなにかだと思ったらしく、ありとあらゆる芸当を披露してくれました。火のように赤い顔をこちらに向け、人間のよ様な目をまるくして、私たちが感心したかどうかを見ようとしましたが、私たちが通り過ぎてしまったので、見ためにもはっきりと、がっかりしたようでした。

山のふもとには骨ばった小柄な老人が住んでいましたが、なんだか乾いた枝でできているような人でした。

髪の毛は頭じゅう、ぼうぼうと逆立っていて、目は愛想よく、きょろきょろ動き、頭は、意識しているのかどうか、何か言うたびに、年とったひざこぞうのあたりまで下がり、とても愛敬のあるおじぎをします。これはみごとと池が二つある茶店を経営しているせいなのです。この老人の仕事は、道に出て旅人を呼び止め、謙遜して、「きたないところ」と称する店でお茶を一杯、それから釣をどうぞと誘うことなのです。ですから、とめようと思ってもとまらないで、おじぎをする習慣がついてしまったのです。

年取いた小柄な婦人もいました。店の中で畳に座っていて、こちらが近くまで行きさえしたら、さぶとんをすすめ、お茶をお盆にのせて出してくれます。この人も以前は足があったのに、ずっと座っていたために、今ではなくなってしまうにちがいない、そんな気がしました。ついで立ち上がらなかつたし、足があるようなさぶりはみじんも感じられなかつたからです。

池があまりみごとだったので、ここはすどおりできませんでした。池の傍にはきれいなベンチがあって、板をわたして歩道が設けてあります。片方の池の傍に

座って、1時間5銭くらいで、釣をして おとぎ話のお姫さまの気分を味わうことができます。

もう一方の池の傍に座ると、まるまると太って鯉ぐらい大きくなった老金魚が、投げ与えられたえさの取り合いをする様を見ることができます。若い金魚をおしのけて、しぶきを上げて闘うと、ついには水が激しくかきまぜられて、獲物であったはずのビスケットがぽーんと高く舞い上がり、土の上でひからびてしまうのです。すると金魚はおこってどこかへ行ってしまいます。老人は大らかに笑うと、用心しながら池の土手を這うように降りて、ピンクのビスケットを水中に放ります。するとまた、例の喜劇が始まるのです。

この店の客は私たちだけではありませんでした。池の傍のベンチには中年の日本人紳士が洋服を着て座っていました。その人は竹の小枝と糸を使って真剣に金魚を釣っていました。とてももったいぶった様子で、私たちが池のこちら側で声をたてて笑ったり、おしゃべりをしたりすると、あからさまに眉をひそめるのです。やがて、いちょうらのシルクハットの中へ、竹を大事そうにしまいこみました。そのためにぼうしはさかさまにしてあったのです。

1890年7月 軽井沢

ほっかしい思い出を胸に、少しばかりうしろ髪をひかれる思いで、朝早く伊香保の地をあとにしました。道は朝日に光り、これが2週間前、雨にぬれながらまっ暗な中をやっと登ってきたのと同じ道とは思えませんでした。谷はあおあおと潤って眼下に広がり、その向うの山は、まっ白な雲が点々と浮んだ、まぶしいほどの青い空を背にしてそびえていました。両側の土手にはきれいなりんどうの花、空には小鳥のさえずり。日本人は早起きで、小じんまりとした農家はみな開け放たれ、ほとんどどの家でも絹糸を紡ぐ作業が進められているところでした。まゆがすっかり大きくなる頃で、蝶が羽を動かし始め、殻を破って飛び出してしまわないうちに、貴重な糸を集めておかなくてはならないのですから。

小さな土色の家、その至るところに山と積まれた柔らかかな、まるで羽のように軽いまゆ——ほかほかいい眺

めです。たいていは雪のような白、そうでなければ薄い亜麻色。ところどころにうす黄緑色の大きなまゆが混じているのは、野生のナラで育つかいこがこしらえたもの。たぶん、こういうまゆは山の中で集められたものでしょう。ちゃんと飼育すれば、かいこはくめの葉にはじみ、どれも同じように小さめになり、飼いの馴らされてくるものです。とはいえ、これもお百姓さんのやり方なのかもしれないけれど、こういう縁があったまゆからとった絹糸はきめがあらくて重いので、他の種類のものと一緒に使うことはできません。

このあたりでは、糸を紡ぐのは老人の仕事とされているようです。年寄にはきつい野良仕事は無理ですから、1軒また1軒と農家の前を過ぎてゆくと、柔らかな白いまゆをうす高く積んだ中に、おじいさんとかおばあさん、ときには老夫婦そろって地べたに座りこみ、粗末な糸巻きで絹糸を紡いでいました。お湯をはった小さな水槽から糸巻きへ、絹糸がするするとたぐられていく。ふしくれたった指が器用に糸を撚る。けれども、紡いだ糸にはどこほこがあって一様ではなく、上等な絹織物にはならないのではないかと思

われます。そんなものでも絹糸は高価で、年寄たちのわずかな収穫で、おそらくその年の生活を支えることができるくらいなのでしょう。

平地へ降りるにつれて、沿道に並ぶ家も数を増します。村道を抜けてゆくと、どの家もまゆの山に埋まっています。その眺めといたら、雪の吹きだまりが道から逆に家の中へ押し戻されたようでした。

私たちは飯塚という、高崎よりも少し手前の駅へ向っているところでした。そこから軽井沢方面へ1時間余り汽車の旅をして、またかごやう人力車やらに揺られるのです。伊香保には腕のいい車夫がいて威勢よく山道を駆け降りてくれましたので、同じ山道を登っていった時のあの辛さはみじんもありませんでした。

平地に降りた瞬間、焼けつくような暑さ。飯塚の小ぎれいな茶店でのもてなしがどんなにありがたく、元気がでたか、とても言葉では説明できません。汽車が来るまでの小一時間、そこで休みました。2階の小部屋は畳敷きで、四方を開け放してあり、縁には幅の広いひさしがかけてありました。どの部屋もひんやりと涼しく、せいたくなくらいゆったりとしていて静かだと

思われました。のきからは、しだがおもしろい形に渦を巻いて、藤棚の上に伸びていました。その一本一本に小さなガラスの鈴がゆわえられ、詩句をひとつふたつ書いた紙がさがっていました。ちょっとでも風が吹くとその紙きれが動き、鈴が、流れる水にも似た音をたててかすかにチリンチリンと鳴るのです。

店の女将は、いちごとかき氷、それにレモン水といった、妖精が食べるような食べ物を運んでくれました。お松はうちわを持ってきて、私たちが舌つづみを打っている間、あおいでいてくれました。汽車が来るころには、朝の暑さや疲れはどこへやら、旅を続けるべく、元気に出発したのです。

次の予定地は横川。この町が位置するのは碓氷峠のふもと、そしてこの峠は雄壮な日本アルプスの山なみへと続いているのです。

横川は鉄道と馬車鉄道のせいで風俗が乱れているし、趣といったものもほとんどありません。鉄道がここで終ってしまうので、山へ入るには、ちっぽけな馬車をよぼよぼの馬が引くという、お粗末な乗り物で、それも少なくとも週に1回は雨に洗い流されたり、土砂崩れで押

し流されたような山道を登って行くのです。馬車は大変な勢いで跳び上がるので、乗客は気の毒に、軽井沢に着くまでにあちこちぶつけて、青あざだらけになります。だいたい、この行程は私には刺激が強すぎるようでしたので、この道を登ってもらうのに、伊香保の車夫たちをつれてきていました。一行の中には人力車を使った者が何人かいました。人力車だと馬車が通った跡を辿ってゆくことができます。

でも私はわくわくするようなせいたくをしました。うっそうとした小道をつたって、森に囲まれた急斜面をずっとかごに乗ってゆくのです。すると、つるのひげが顔もなで、しだや松、藤やあじさいのほのかに青い香りが荘厳な森の緑の中から立ちのぼり、押し寄せてきます。道ばたのところどころに、空っぽの栗のいがでもころがっているように、小さな茶色の小屋が建っています。そこで車夫たちがひと休みできるように、何度か足を止めました。

小屋はきまって流れのそばとか、滝の近くにはあり、おそらく何も手を加えないままの岩を背景にしています。森を見はらせる小さな部屋がひとつ、そこに旅人が休むためのベンチ、お茶をいれるためのうずみ火、お

茶を飲むための ちゃんと清潔にしてある 青い茶碗が少し。

緑茶というのは なんて元気が出る飲み物なのでしょう。一行の一人は歩いてついてきましたが、小さな茶碗の中で湯気を立てている、うすい黄金色の飲み物をとて喜んでいました。お茶はどんなに せいたくな 冷たい飲み物よりも ほるかに のどの渴きをいやし、炎天下を長いと歩くのに 必要なだけの 刺激を神経に与えてくれるのです。そのほのかで品のいい香り——私たちの日本漫遊とあまりに縁が深くなったので、何年の月日が流れようと、お茶の香りをかぐとたちまち、森の中や道ばたの小屋、日に焼けたやさしげな顔、すがすがしい空気、そして東洋の まぶしいほどの 明るさが 思い出されるのです。

とうとう森も尽きて、そのうっそうとした深みから尾根へ抜けました。尾根に立つと、風景というよりも宇宙が足もとからずんずん沈みこんで、暖かみのある銀色と緑がかった金色に輝く低地に 続いてゆくように思われました。この山に源を発する川が、平地のほのかに輝きの中へ、どれもみな光のリボンとなって、網の目のように伸びています。どっちも

向いたらいいのかわかりません。夏の日あの最高の瞬間が訪れたのです。色という色はくもりのない宝石の輝き、谷という谷は生きたびろうどの夜をまとい、岩という岩は紫の炎と燃える。水際はまるで天国から抜け出たよう。そしてすべてにふり注ぐ陽の光。あふれるような黄金色、やわらかく光満ちてあたたかく——幸せの涙さながらに。

今の私には 前後にそびえ立つたくさんの峰々の名前を挙げる事ができません。きっと夏がゆくにつれて、そのひとつひとつがわかるようになるでしょう。けれども今日が初めてであってみれば、峰々の雄大さ、その姿の多様さに 圧倒されてしまい、それぞれの名前を尋ねることすらできなかつたのです。

のどかな平地から何百メートルという高みで、山あいの水場に封じこめられた水が、大風に荒々しく砕け散る白波となってたわむれる、その壮烈なたわむれも今が極みとみえた瞬間に、そのままの姿で岩と化してしまつたに違ひありません。そのうつろさは海のかぼみ、不毛さは砕け散る波頭、鋭さは北風の冷たさのよう——でも、一本どうしたら、あの日私が目のあたりにしたことをお伝えて

きるでしょう。天と地の間、あの屋根に立ち、沈みゆく夕日の炎が、生ぬくもりを与えることはとうていかなわぬ冷たい岩山に、むなしく口づけするのを見つめていた、あの時の光景を。

そこに長いこととどまっていたとは、あえて思いませんでした。山あいではこういう夕焼けのあとは冷え込むものだからです。

碓氷峠の頂上にある村の宿で、しばらく車夫たちを休ませました。それは貧しい、さびれた村で、夏の間そこを通るお遍路さんの張り番をする寺がありました。幅の広い石段が寺まで続いていて、そこからの眺めはみごとなものでした。美について瞑想すれば徳がいよいよ高くなるというなら、この御住職はとて徳の高い方に違いありません。

御住職の10歳になる息子は山門によりかかって、ものおじもせず目をキラキラさせてこちらを見ていました。この子は村の厄介者なのだそうです。宿の主人から、悲しくなるようなこの子の悪さの話を聞かされました。それをこの少年ははねつけるようにせせら笑うのです。学校へは行こうとしないし、信心深い人たちが祈りを

こめて山門に吊す御幣を破り捨てることもある。自分の着ているものは破る、父親の本はなくすという始末です。何よりもひどいのは、尊敬するのが当り前の父方の祖母に悪さをするということです。ある時はおばあさんの飼った猫を殺す。またある時は、カラスの死骸をおばあさんの家の雨戸に打ちつけておいて、リッパな行列が通るところだから、急いで出ておいでと、おばあさんを呼ぶのです。村中の人はこの若いならず者はもうどうしようもないと思っているようですし、

「御住職さまにはお気の毒なことだ」と誰もが考えているのです。

峠の頂から私たちは速やかに、しかも唼々と降り、少し行ったところで浅間山を見ようといはし立ち止まりました。浅間山は大きな活火山で、山脈のこちら側全域を威圧しており、これまでに軽井沢の高原地帯を灰で埋めつくし、すっかり荒らしてしまったことが1度ならずありました。

緑の丘の向うに堂々とそびえ立つ姿は、実際よりもずっと近くに見えます。噴火口から噴煙が重くたなびいているのが、軽井沢からは南西の方に伸びて見えます。そ

れは水平に山に入っていくトンネルの形をしているのだと教わりました。峠のこの地点からは、すばらしい夕暮の景色を望むことができます。太陽が浅間の頂上のほぼ真うしろに沈み、たなびく噴煙を深紅と黄金色にふちどるのです。それも、下の道へ入ってしまうと見えなくなってしまいました。いよいよ目的地にたどり着いた時には、薄暗い黄昏の静けさが山々を寝かしつけているところでした。

今、世界一すてきな書齋でこれを書いています。頭の上には松の枝が重なって、快い緑のアーチを作っています。この広間の柱はといえは、あたたかい褐色の幹、光と風のせいだ神秘的な記号めいた形にこつこつしていて、手を触れたら、ベトベトとくっついてはなれなくなってしまう松やにかがいはいす。足もとには松の葉が何層にも重なって、ふかふかのじゅうたんを織りなしているので、どんなに疲れた足でも軽やかに歩けるに違いありません。

そして音楽が聞きたいと思えば、野生のクレマチスの生垣と、白いあじさいと藤の房がからみ合っている間を流れるせせらぎが、すぐ近くで涼しげな調べを

奏で、一方では、虫たちの陽気な羽音が、時はまひると告げています。鳥たちはみなひっそりとしている東洋の暑いまひるを。

今朝早く、寢室の縁にそっと出て雨戸を開け、外を眺めました。下は森のような庭の深い緑、それから丘陵、その向うの平地。夜明けの無垢の光の中でまだほの青く、夢を見ているよう。私たちのいる小さな開拓地の両側には、すぐそこから森が広がってゆき、左手を護る山々の頂まで上へ上へと伸びています。右手をみると、森はもっとなだらかに、緑色の壁のような崖の下まで、起伏して続いています。その緑の壁の斜面から、岩の階段が伸びています。きっと神社でもあるのでしょう。岩には何かの形が刻まれ、その下には座る場所、上の方の裂け目からは緑の枝が長く突き出て揺れているのが見えます。

ものみなすべて静寂の中にあり、まるで今創造されたばかりで、その創造主が生命の息を吹き込んでくれるのを待っているかのようです。そうしてますます張りつめてゆくあまりの静けさに堪えきれなくなると、突然、さざ波の立つ音が歡喜にあふれて、さめやらぬ森から

響きわたったのです。冴えわたったその音は凱歌の響き。あれは天国の門から出てきた音かもしれません。音が止んでも、その振動はまだはっきりと山々の間を縫って響いてゆきました。そしてたちまち、遠くの、あの人里離れた神社の下の森から、震える音が返ってきたのです。

どのくらいそうやって、耳を傾けて立っていたでしょう。人生の新たな区切りとなるように思われる瞬間というものがあります。あれはまさにそういう瞬間でした。そんな時、時間には何の価値もなく、自分が何者であるかさえ忘れてしまうのです。ナイチンゲールが朝の祈りの歌を終えるまで、きっと他の鳥たちはみんな私と同じように静かに耳を傾けていたのです。その鳥たちの歌がやがていっせいに始まり、朝日が山の頂に触れて生命の息吹を与える頃、私は美しさに心満たされてそこを離れました。

これで、これから先どんな悲しみにあっても、どんな貧しさにあっても奪い取られることのない豊かな遺産がまたひとつ増えました。この幸福そのものの1時間という遺産が。

この夏の住まいを、私たちは「平安の館」と呼んでいます。峠に至る唯一の道に近いにもかかわらず、緑に包まれ奥まったところにあるからです。村があるので、それも庭のはずれを過ぎて、門を護るように立っている松の木の間を抜け、少しぐらぐらする橋を渡って流れを二つ越え、山腹に沿って曲がった道を少し行かないと見えません。それでやっと家が数軒見えます。もう少し行くと、貧弱な通りがくねくねとどこまでも続き、また橋に出ます。そこから野の花が咲き乱れる平地に出ますが、その平地は何マイルも同じ高さで続き、両側に美しい緑の山々がそびえています。ここでも標高900メートル以上です。平地を窓から眺めるのですが、民家の屋根ひとつ見えず、このすてきな孤独感をじゃまされることはありません。

私たちの家は日本式家屋で、木造りの2階建、1階にも2階にもぐるっと広い縁がめぐらしてあります。2階の縁には深々とひさしがはり出している上には、普通は障子戸にするところをガラス戸にしてあります。それで、どんなに天気が悪い日でも、普通なら日本の家では木の雨戸を閉めなければならぬのに、そんなことをして光をさえぎらず

に済みます。

室内の仕切りも縁に面している側はガラス戸です。部屋と部屋の間仕切りは紙張りで、自由に取りはずすことができます。ですからその時の気分に応じて、思いっきり大きな部屋にすることもできるし、数室に小さく区切ることもできます。ガラス戸には重たい蚊帳をたらしのれんにしてあります。天井から床まで届く丈で、あちこちに切り込みが入っていて出入りできるように作られているのです。こののれんのおかげで虫も入ってこないので、ある程度、プライバシーも保たれるのです。ここは夫と私、それに連れ合いの二人には十分な広さで、1階と2階を分けて使っています。

ただ使用人の部屋とお勝手は、曲がりくねった道を山の奥の方へ少し行ったあたりにあります。そこから竹のかけひでうまい具合に各々の風呂場(一部屋に一つ、うれしくなるくらい文明的な東洋風のお風呂がついています)に、食事の時に出されるのと同じ、これまで味わったことがないような、きれいで新鮮な水が送られてくるのです。水は岩から出るぬき水で、女中さんが水を入れて持ってくるびんは水の冷たさで白くなり、真珠を飾ったよ

うな水滴がついています。

言うまでもなく、どの部屋にも畳が敷いてあり、階段の一番下の奥まったところに、部屋ばきがおいてあります。散歩から帰って、みんなが縁の外の階段に腰かけると、召使いたちが部屋ばきを手に、走り出てきます。これをはかばかいうちまいたみやすい畳の上を歩かないのです。畳があまりすてきで柔らかいので、私は椅子に腰かけずにいつも畳に座っています。暑い時、畳の上で眠るといい気持です。ひんやりして、固すぎもしなければ柔らかすぎもしない。

ここには小ぎれいな粗造りの椅子がいろいろ揃っています。鏡の枠は小枝をきれいにはめたもの、テーブルの脚は若木の細枝——これは全部、この調度を作った日本人の大工さんの考案です。大工さんは私がまわりの森と調和のとれたものをほしがるだろうと考えてくれたのです。そこかしこにあふれる木の香り、新鮮な草で編んだすだれ、小川のせせらぎに松林、それに快適な涼しさ！夜は毛布がいらいます。午後はいつも軽いフランネルの服を着て過ごしています。

ここへ着いた晩、縁に腰をおろして気持よく休ん

でいると、庭のずっと向うの端にキラキラと踊っているような明りが見えました。ゆっくりと近づいてきたのを見て、やっとちょうちんが揺れているのだとわかりました。おかげで5匹の犬たちがいっせいに、とびかからんばかりに吠え立てました。そのちょうちんの持ち主はちょっとひるみましたが、勇気を出して近づいてきました。すると白い制服、白手袋、それに金モールといういでたちのほでやかな人が、驚いている私たちの前に現れて縁の階段のところで立ち止ると、軍隊式に敬礼をしました。この人は私たちの担当の警官で、夏の間、お世話になることになっているのです。紙きれを突き出すなりこう叫びました。

「名刺であります。」

それから夫をじっと見て、

「貴殿が公使様で？」

と尋ねました。夫がうなずくと、自分は、私たちの世話をすべく長野から派遣されてきたのであり、その命令を細心の注意をもって、かつ熱心に遂行する所存であると述べたものです。英語はどうにも奇妙で、1度には一言ずつしぼり出すのです。でも、助けてもらいたくはないらしくG氏が流暢な日本語で挨拶すると、だいぶ御機嫌

ななめの態でした。別れの挨拶ときたら、独創的で、「どうぞ!! 受け取りなさい!! 眠りなさい!!」

と言って帰ったのです。彼と、そのちょうちんは再び暗闇の中へ揺れながら消えてゆきました。村に宿舎があって、彼はこの特命を利用して、同僚たちの間をいばりくさって歩き回っているという話です。

1890年7月 軽井沢

7月は朝もすてきですが、夜も負けないくらい魅力があります。澄んだ大気をとおして輝く星を見ながら、夜ふけまで外で過ごすのです。この輝き、平地では決して見る事ができません。緑の芝生は——この芝はずっと遠いところから少しずつ運んできたもので、今ではきれいに生えそろっています——下の池までなだらかに続いています。こんな静かな夜は、池のおもてに星が姿を映しています。そういえば、今日は星の恋人たちの月です。まずその物語をお話ししなくてはなりません。

それは2,000年以上も前に日本に伝えられたとても古い物語です。キプロスがペルシャで勢力をふるい、ローマはまだ狼が出る沼地で、そこにあばら屋が並んでいるだけというころ、また、ぶどうの木が茂り、けしの花が咲くエトルリアの地が、紫衣をまとい金を飾った歴代の

王によって 治められて いたころのことです。そのころの日本は、いわば中国のひざもとに控えていました。そしてこれは 7月のある夕べ、この国に語り伝えられた 話です——7月7日の物語、七夕と呼ばれる祭の話。

世界の始まりのころ、神々がまだ地上に降りてくる前のこと、天の皇帝には娘が一人ありました。たいそう美しい娘で、太陽の女神、天照^{あまてらす}でさえ、この娘のそばでは色あせてみえました。それに とても 器用で、天の宮廷の衣装はすべて娘が織りました。それは、真珠のようにきらめく露を飾ったかすみの夜、^{さんぜん}燦然と輝く礼服に、ばら色のうすぎぬの被^{かぶ}り物、ダイヤのような星飾りをちりばめた黒いびろうどの外套。天上のどこを捜しても、これほどの糸を紡ぎ、これほどの布を織る織りひめはいませんでした。娘はいつも金色の機の前には座っていました。機織りの仕事に満足し、いつもそこに座っていられさえしたら、ほかには何もねだりはありませんでした。それというのも、まだ恋を知らぬ身であったがため。人々はこの娘を天の織りひめ、織女^{しよくじよ}と呼びました。私たちがいうヴェガのことです。

さて、娘がいかに美しく、賢いかを知ると、多くの神々

が織女を妻にと求めてきました。ところが娘は誰一人として愛することなく、そうして娘を手もとにおくことを天帝は喜び、こう言って求婚者たちを追い返しました。

「娘は金色の機にとついたので。ほかの夫などあれの心は求めはせぬ。」

神々は笑って、あざけるように言いました。

「全く、織女さまは奴隷の身、女神などではない。結婚しなければ、年をとらないとでもいうのか。愛することがなければ、どうやって不滅^{いのち}の生命を得ることができよう。あなたは冷酷な父親だ。」

たとえ女神といえども、人を愛したことがなければ永遠^との生命は得られない——それは周知のことです。愛の芽ばえは魂の芽ばえであり、魂は不滅なのですから。夜が明けそめるころ、天主様は玉座に座って考え込んでいました。秋の月あかりのように白い、長いひげを指ですきながら。

「あの神々は年も若くやかましい連中ではあるが、言っていることはたしかにほんとうだ。織女は人を愛さねばならぬ。さもないと機を織るだけでは、あれは死んでしまう。さてさて、あれが心を寄せるほど美しく、あれをど

こかへ連れていこうなどと、だいそれたことは考えないような、身分の低い男はいないものだろうか。」

そして天主様は、ある美しい牛飼いに目をとめました。牛飼いは天の平原で牛を追っているところでした。顔かたちには気品がありました。身につけているものは貧しく、星がきらめく草地を、白い牛を追ってゆっくりと満足げに歩いていました。この若者はわし座の子として知られています。

天帝は娘に尋ねました。

「姫よ、あの牛飼いが見えるか。水辺に生えるあしのように、すらりと背の高いあの若者が。」

「はい、お父さま」

と姫は答えました。

「前にも1度お見かけしたことがありました。あの方の美しさで目が見えなくなり、あだな望みで心が焦げついてしまわぬように、2度と見ないでおりました。こうしていると私の金色の機も、宝石のような織り物も色あせてみえます。」

「それは好都合。あの牽牛をおまえの夫にしてやろう。」

織女はあまりの幸せに、金色の機の上に顔をふせて

喜びの涙を流しました。その涙は織り物をつたってこぼれおち、日の光を受けて最初の虹となりました。そしてその日、娘は牛飼いの牽牛と結ばれたのです。牽牛も長い間、娘を愛していたので、ただその名前を呼ぶだけで、他には何も言うことができませんでした。

天の宮廷には喜びが満ちあふれました。織女が永遠の生命を得たのですから。織女自身は永遠の生命など少しも気にかけていません。かたわらには牽牛が座り、何度も何度も織女の名前を繰り返しては、どれほど自分が彼女を愛しているかを伝えることばを捜しているのです。織女は機織りのことさえもう気にかけてはいませんでした。機の金色の杼は静かに止ったまま、牽牛の白い牛たちも静かに立ったまま、牧場への道がわからずに、主人が牧場へ連れていってくれなくなったのを不思議に思っていました。牛飼いは牛を飼うことを忘れ、織りひめは機を織ることを忘れ、二人は7月の星あかりの中で、お互いのことしか心になかったのです。

すると天帝はひどく怒って牽牛に言いました。

「生意気な牛飼ひめ。おまえのせいだ。娘が機織りをやめてしまうとわかっていたら、娘をおまえに嫁がせたりは

しなかったものを。さあ、天の川の向う岸へ行ってしまえ。1年の月日が流れるまで、2度と織女を抱いてはならぬ！」

大きなわしが飛んできて、つめで牽牛をつかみ上げると、天の野原を白く流れる天の川の向う岸へ降ろしました。牽牛の牛はあとを追って流れを泳いで渡りました。織女は嘆きのうちにとり残され、岸辺にひざまずいて、さめざめと泣いていました。

「娘よ、機を織りに戻りなさい。」

天主様は言いました。

「愚かしい嘆きはやめるがいい。今日から1年たったら、一晩だけ、あの牛飼いのそばにおいでやる。」

足どり重く、悲しげに、織女は機のところへ戻り、12たび月が満ち欠けするまで、黙々と機を織り続けました。織女の鼓動のひとつひとつが、牽牛への愛の叫びなのでした。一方あわれな牽牛は、かたわらに立つ牛のひざもかくれるほど草深い天の牧場において、川の向う岸、宝石のような糸がかけられるたびに白や紅や緑に輝き出す機の光の中、織女が座っているあたりを眺めていました。

とうとう7月7日の晩がめぐってきました。杼はひとりでに止まり、天の川は、恋人たちが足を濡らさずに逢うことが

できるようにと、二つに分れ始めました。その時、力強い羽音が聞こえたかと思うと、天はたちまち、無数のかささぎにおおわれしまいました。哀れな恋人たちの身の上を嘆いていたやさしい鳥たち。空中に羽と羽、くちばしとくちばしを寄せて並び、天の川の兩岸を結ぶ橋をかけたのです。牽牛はその橋を駆け渡り、織女も両の腕かいはに抱きしめました。こうして、短い夏の一夜、星の恋人たちは結ばれたのでした。次の日のあかつきには、牽牛は愛する人のもとを去らなければなりません。そしてまた姫と語らうまで、12の月を待たなければなりません。

姫は夜ごと川岸へやってくると、牽牛の方へ両手を伸ばし、その名を呼びます。牽牛もその姿を見ると、織女の方へ両手を広げるのです。けれども、大きな激しい流れのために、お互いの声を聞くことはできません、この不思議な一夜が言われるまでは。かささぎは、決して二人のことを忘れません。かささぎの橋はきらめく翼のかけ橋。いつも流れにかかる橋。そして二人の愛の強さは、一夜の幸せに、1年を待ちわびる辛さも忘れさせるのです。

織女と牽牛は離ればなれになっている恋人たちの守りであり、また離れているがゆえに愛はより気高く、きずなは

より強くなる、忠実な夫と妻の守りでもあります。この夜、渇いた心は、甘い愛の糧を求めて祈ります。その祈りがかなうことを願いながら、幸せな恋人たちは心変わりや別離がこないようにと天の二人に祈願し、この一夜の逢瀬が1年の別れを意味する二人に、心から同情するのです。夫を亡くした妻は、亡き夫の魂を二人に託します。家に残された妻は、一人寂しく旅をしなければならぬといふ夫に加護を、と祈ります。乙女たちは刺しゅうの腕前の上達を祈り、刺しゅうしたものを織り姫にささげるのです。そして誰もが、この夜だけは雨が降らないようにと祈ります。雨が降ると川があふれ、天の恋人たちは逢うことができないからです。

詩人が作ったたくさんの愛の詩を、花もようや、金粉を散らしたきれいなたんざくにしたため、それを若者たちは2本の笹竹に吊します。この晩には、こういう竹がどの庭にも立てられるのです。そよ風が、葉の中のたんざくを軽やかに揺らし、開け放した部屋の方へと吹いてゆきます。そこではおあせいの若者が畳に座り、花のようなお菓子を食べ、香りのよいお茶を飲み、一人ずつ詩を暗誦したり、三味線に合わせて吟唱したりしています。

それから楽しい遊びをします。障子の陰でする影絵遊び。家の中、あるいは、とび石や橋、小さなくぼみや築山のある庭でするかくれんぼ。あたり一面、若い声と、衣ずれの音と、薄暗い小道を追いかけ合う男女の足音で刻まれる楽しいリズムで満ち溢れるのです。

もうひとり別の娘の物語があります。日本では王昭君^{おうしょうくん}という名になっていますが、この名前にしても織女にしても、君とか女とかいうのは単なる接辞にすぎず、身分や年令を示すものです。日本では、女の子がまだ小さい時分、その家の中だけで、たいてい子とか女などを名前に付けて呼ぶのです。王昭君の物語は正確には9月の話ですが、思い出したので、今ここでお話ししましょう。

この話は、私が持っていた外国の小さな1枚の絵がきっかけで知りました。その絵のことはどこか心のすみの方で覚えてはいたのですが、どういう意味の絵なのかは、日本の友人が話して聞かせてくれるまで、知らずにいました。友人が言うには、それは中国の話だそうです。その時彼が話してくれたのを聞いて、この話を覚えました。

その絵というのは色づかいの巧みな版画で、ほっそりした色白の少女が、着飾って、恐怖と絶望の表情をかべている様子が描かれています。少女は馬に乗せられていて、馬は周りも荒々しい毛むくじゃらのモンゴル人たちにとり囲まれて歩いています。モンゴル人の顔色は赤みがあった褐色。手も顔も剛毛におおわれています。そのうちの一人が、馬のかたわらも歩き、かわいそうに、おびえている少女を馬の背にしっかりとおさえつけています。着ているものからして頭と思われ人物はぞっとするほど恐ろしい顔をして、腕を組んで、横に立っています。手下どもは手荒く奪い取ってきた美しい戦利品に狂喜しているようです。

これは王昭君という娘の絵だと友人は言いました。そして彼女の物語はとても悲しい物語だとも。何世紀も昔、漢王朝が中国を治めていたころ、皇帝はモンゴルの汗に対して、たくさんの貢物を納めなければならぬことになっていました。モンゴルの汗はそれに報いるどころか、常に国境を侵略し、皇帝が納めようとするよりはるかに多くのものを奪っていました。しかし、当時の汗の力は、抵抗を試みても無駄なほど強大だったのです。

中国の宮廷には美しい女たちがたくさんいる、という話が汗の耳に入りました。汗は思いました、中国の宮廷から妻を迎えられたらどんなにいいだろうと。そこで中国の皇帝のもとへ大がかりな使節を派遣して、汗の妃として美しい姫君を一人差し出すようにと求めたのです。

皇帝はこの野蛮人の無礼な態度にひどく腹を立て、自分の皇室の姫がそのような地位につけられるという考えも甘んじて受け入れることができませんでした。けれども、使節の者には丁重に返事をしました。そして、汗につれそうにふさわしい、中国一美しい姫を選ぶことができるように少し時間もいただきたいと申し出たのです。使者を歓待し、たくさんの贈り物をして、何とか、楽しい時を過ごさせました。その間、皇帝は宮殿の奥でどうしたものかと思案をめぐらしていたのです。

皇帝の悩みも知った母皇后は、やってきて言いました。「天帝の子たるもの、落胆してはなりません。あの野蛮人に皇室の姫を送りはしません。芸の達者な美しい女官を選び、その娘をモンゴルへやりましょう。」

皇帝は、それはいいことを言ってくれたと思いました。たち

まち、うわさは広がり、300人に及ぶ皇帝のめかけたちの驚きといたら大変なものでした。彼女たちは宮廷で母皇后の監督のもとにしつけられ、人を楽しませ、慰めるあらゆる技を身につけた美しい娘たちです。皇帝の后は彼女たちをなだめて言いました。

「みんな、こわがることはありません。天帝の子にお仕えする幸せなあなたがたがこの宮殿を離れたり、他の皇子の面前に引き出されたり、ましてや平民の男の前に出されたりするようなことは決してありません。汗の花嫁はどこかよそで見つけられるでしょう。」

そしてそのとおりになりました。皇帝がこう考えたからです。「あの野蛮人に美人のなにがわかる？ 全く、あんな奴は百姓女だって美しいと思うだろう。とはいえ、奴の勢力は強大、ここはひとつ美しい女を捜し出し、あの使者どもにその女を姫だと伝えよう。誰にもわかるはずがない。」

そう、誰一人、この宮廷の女たちの顔を見た者はないので、皇帝その人と彼女たち自身の召使いのほかには。

命令が伝えられました。多少とも宮廷に関係のある美しい娘はことごとく、その肖像画を描いてもらうことと

いうのです。皇帝がそれを見て、誰を野蛮人の国へ送るか決めようとの心づもりなのです。そして皇帝おほかえの画家が、夏の宮殿のあずまやへ、狩猟の宮殿へ、北京にある黄金の宮殿へとつかわされました。そこには母皇后や皇女たちに仕える美しい乙女たちと、宮廷の高位の役人の娘たちが住んでいたのです。

この人捜しの真の目的はふせてありました。それで、女たちは、せがんだり、口説いたりして、自分の肖像を求めているのは皇帝その人だということも聞き出すと、どの女も自分こそ皇帝の目にとまるように、一番美しく描いてくれと、画家に頼みこみ、わいろを送りました。

どの女もどの女も——王昭君だけは別でした。これが彼女の名前だなどとは思ってもみませんでした。おそらくは別の名で呼ばれていたはずで、どうして名前が違ってしまったかという謎をたどると、やはり同じように、恋人から遠く引き離された、あの織女星へと帰りつくようです。彼女を題材として日本の詩人たちは絶えることなく哀歌を書きつづけています。いずれにせよ、私がその悲しい物語を聞いたところでは、王昭君という名前でした。ですから、こうして日本名で呼んでおくことにしましょう。

彼女は高官の娘で、父の屋敷の中、女たちの館で大きくなりました。近くには仏塔があり、そこにはまた大きな庭園とほす池がありました。娘は仲間たちと、ほす池の夢のようなうす紅色の花の中に舟を浮かべ、白い大理石の橋の下に舟をとめては、香をたきこめたたんざくに恋の歌をしたためていました。王昭君はこの上なく幸福でした。

14になった年に、ある若い貴族との縁組みが決まりました。それはそれは勇敢で、美しい若者だと聞かされてはいましたが、二人とも婚礼の式が済み、若者が、花嫁の顔から緋色の被り物を払いのける時にならなければ、お互いを見るのが許されません。仲人役の老婆は相手の若者には王昭君のすばらしさを、王昭君には若者のすばらしさを吹きこんでいました。

ある日、若者が馬に乗ってゆくときに、娘は庭のへいの格子窓のかけにかくれて、彼の姿をはっきりと見てしまいました。その時、この娘のあわれな小さな心は、若者の乗った鞍にぶらさがって、一緒に運び去られてしまったのです。しつけのよい娘なら婚礼の前の三日三晩を泣きあかし、夫となる人の家へ連れられてゆくときには、拒もうと

するものだと いうけれど、自分もそうしなければならぬものだろうか、娘は考えました。両親のことは大好きだけれど、あのやさしそうな、美しい若者のもとへ嫁ぐ時には、泣くべきことなど何もないだろうと、思ったのです。

婚礼の仕度もほぼ終ろうという時、皇帝からの使いが画家とともに門口に現れ、王昭君の父親に会いたいと願ひ出ました。父親は二人の見ずしらすの男に、娘の顔を見せることなど、あまり快く思いませんでしたが、皇帝の命令は絶対でしたし、この家に美しい娘がいることは世間中に知れわたっていました。娘が使者の前でどぎまぎしていると、使者はある特別な理由があって、皇帝が娘の肖像画をほしがっておられるのだと、やさしく説いて聞かせました。

「なぜ私の肖像を？」

娘は叫びました。

「私など道ばたの雑草にすぎません。皇帝さまの立派な宮殿には、ジャスミンの花のように美しい方々がおおせい いらっしゃるではありませんか。」

そして、恋する者の知恵から、娘は画家に一握りの宝石を与え、自分は醜く、顔は絵に描いて皇帝の御目

に触れさせる値うちなどないと申し上げてくれと頼みました。そうすれば、皇帝は娘を宮廷につれてこようなどと決して思わないでしょうから。画家は笑って宝石を受け取り、娘が頼んだとおりにしました。ほかの女たちはみな、自分に白羽の矢が当たることを願って、できるだけ美しく描いてもらおうとして、画家に宝石を与えたのです。その結果どんなおそろしい運命が待っているかなど、夢にも思わずに。

使者たちが皇帝のもとに戻った時、とても美しい女たちの絵をたくさん持ち帰ったので、皇帝は喜びと怒りとも同時に味わいました。

「なんということだ。わが帝国は、神々もうらやもうというほど、美しい女たちがたくさんいる。それなのに力がないばかりに、この美しいざくろの花を1輪、あのきたならしい野蛮人に連れそわせるために差し出さねばならぬとは。誰一人行かせぬ、誰一人！」

するとずるがしこい使者は、王昭君の話もしました。その娘は色が黒く、どんぐりまなこで口も大きいと、まさしく、王昭君がそうしてくれと頼んだとおりに。皇帝は喜んで言いました。

「よくぞ醜い顔の娘のことを話してくれた。それこそ汗の容貌に似つかわしい。王昭君をモンゴルへやってあの無礼者の花嫁とするのだ。」

王昭君が汗の花嫁に望まれたという伝言がすぐに伝えられました。厳しい命令だったので、彼女はただちに宮殿へ赴かなければなりませんでした。父の家を去る時にほんとうに泣かなくてはいならないだろうかと思っていた娘は、こうして父のもとから引き離されようとする時、ほんとうに辛い涙を流したのでした。娘の両親もついてゆきましたが、その心は鉛のように重く沈んでいました。

宮殿に着くと、王昭君は母皇后のもとへ連れてゆかれ、これから自分がどうなるのかも聞かされました。王昭君は胸中の苦しみから、顔は青ざめ口もきけませんでした。まだ年も若く、苦しみというものを知らなかったのですから。母皇后の侍女が、宝石もちりばめた、みごとな皇女の衣装を娘に着せ、頭には皇室の婦人だけに許される黄金の鳳凰の小環をかぶせました。すっかりでき上がると母皇后は輝く衣装をまとった娘を見て、独り言を言いました。

「あの使者は息子に嘘をついたのだ。この娘は白いざ

くろの花、どの皇女よりも美しい！この子をここにおいておきたいものだ。」

けれども、もう遅すぎました。使者は出立の準備も整い、今、皇帝に最後のお目どおりをしているところだという話。王昭君は旅立つ前に皇帝に挨拶をするようにと命じられました。心は大理石のようでしたが、勇気はくじけず、皇帝の前に連れてゆかれる時も、涙ひとすじ見せませんでした。謁見の間に入ってゆくと、皇帝は不用意にも使者に向って言いました。

「ごらん下さい。あなたがたの王の玉座をわかちもつ名誉を受ける者として、われわれが選んだ姫でございます。」

言い終ってようやく目を上げた時、皇帝の目の前には王昭君が、星のない夜空にかかる満月のように美しく、静かな流れのほとりの若い柳の木のように気高く気品に満ちた姿で立っていたのです。皇帝の心は高鳴り、激しい怒りがこみ上げてきました。このたぐいなく美しい娘が自分の宮殿から去らなければならぬ。砂漠に沈みゆく月のように。一瞬、皇帝は動揺しましたが、モンゴルの使者たちに伝えてしまった勅語を思い返しました。使者

たちは口を開けたまま、この美しい姿にみとれていました。皇帝は袖で顔をおおいました。王昭君は御前にひれふし、その目の前から永遠に消えてしまったのです。

王昭君の涙を笑い、乱暴に扱うような無礼な男たちの手で、娘が馬に乗せられ、都の外へ連れてゆかれるのを母親が見た時、王昭君は両の腕^{かひな}を伸ばして助けを求めていました。父も母もそれに応えてやることはできませんでした。皇帝の命令でしたから。

母親は自らののどをかき切り、せめて魂だけは娘のあとを追ひ、見守ってやることをお許し下さいと願いながら息絶えました。父親は心中ひそかに皇帝をのろい、この都を手に入れたいと望んでいる汗の手に、皇帝とその都とも引き渡す陰謀をめぐらし始めました。王昭君と結婚するはずだった若者は、別の娘と結婚して幸せに暮し、王昭君のことなど忘れてしまいました。

草原を越えて北へ20日間、馬に揺られて行ったあとで、王昭君がどうなったか、私は知っています。でもこのお便りで全部お話ししてしまうのはやめましょう。おみやげがなくなってしまうから。

どうしてわかるのかとお尋ねですか。ずっと遠い昔の、し

かも見知らぬ国で起ったことなのに、どうやって知ることが出来るのかと。話の一部はここで聞きました。あと少しは、ある夏の日、あの仏塔に臨むはず池のほとりであったのでしょうか。あとは、私もまた馬に揺られながらあの草原でそっと聞かせてもらったのです。

そばだてた耳に聞こえてくるささやきを、一体誰に止められましょう。

1890年8月 軽井沢

これはためになると思う本は全部、ここまで持ってきたのですが、こういう環境の中では、読書など全く時間の浪費というものです。新鮮で美しいものばかりをふんだんに見てしまうと、活字を読んだり他人の考えに触れたりしても、心満たされることはありません。かつて著わされた本で、朝の空に揺れる松の枝ほどに、力強さとやすらぎとも感じさせてくれるものがあるでしょうか。神の書は必ずしも文字に書かれているとばかりは限らないのです。これを書いている、風とおしのよい2階の廊下は松の枝のあたりと同じ高さで、松はその緑の腕をゆったりとこちらへ伸ばしています。

ずっと平地を歩き回って、今帰ってきたところなのです。このあたりはひどい台風に見舞われました。そのことをまずお話ししましょう。

先週、突然、台風がやってきました。幸い、少しばかり

そのきざしはありました。一日中雨が降り続き、晴雨計がまるで舞蹈病にでもかかったように動くので予想がついたのです。煙突や雨戸に気を配り、動物はみんな物かげに避難させました。山中も流れる川もせき止めて洗濯場に水を引いていますが、せきをくずして、ひどい洪水にならないうちに、水が本来の川の流れるにもどるようにしたりしました。けれども、いくら用心したところで、災害そのものが全く恐ろしくなくなるというわけではありません。災いが過ぎてしまえば、それで受けた被害に文句をいうよりも、もっとひどいことにはならなくてよかったと、ありがたいと思うものです。前にお話ししたと思いますが、この山荘が建っている土地は三角形で下降する2辺は川と境を接し、川は一番下の頂点で合流しています。うしろは高くなって山の方へ続き、全体がかなり急な斜面になっているのでこんな時は好都合です。増水してもすぐに水がはけて、建物にも庭にもそれほどひどい被害を受けずにすみますから。でも猛烈な水の勢いで外界との連絡はとだえてしまいます。

忘れもしないあの日、一日中ひどい暑さで、雨足は激しく止むことを知らず、鉄のように屋根をうつ。芝生も

道も流れる水で区別がつかず、池も雨にうたれて、泡立っている。廊下は全部ガラス戸でしっかり立てきてありましたが、部屋が水びたしにならないように、2カ所だけは重たい雨戸を閉めておかなければなりませんでした。庭や森の虫という虫が家の中に逃げこもうとしているらしく、蚊とか蛾とか石つぶてのようなこがね虫とか、みんなガラス戸に体当りしてきます。窓が純日本式に紙張りでなくてよかったと何度も思いました。紙張りだったら、この嵐が止むまでずっと、ろうそくをともし、雨戸を立てきてひきこもっていかなくてはならなかったはずなのです。友人たちの多くがそうだったように。

気の毒に、召使いたちはとてもはらはらしていました。これから何が起こるのか彼らにもわかっていましたから。コックさんが、特製の高い鉄の煙突を調べに、「小さいコックさん」の肩を踏み台にして屋根に上がろうとしているのが見えました。召使いたちは戸外での生活も多かったのも、もしひどい嵐になるようなら、おおいをかぶせなければならぬものが庭にたくさんおいてあったのです。犬までがおとなしくて声もたてず、散歩をせがんだりもしませんでした。あがり口の階段の下にはとってお

きの骨が埋めてあるというのに、かき回ることさえしなかったのです。

例の忠実な警官(名前は^{ふりはた}降旗といました)は私たちが大丈夫かどうかを見に、いつもは日に2回のところも数回も巡回にやってきました。G氏は、竹のかけひが全部、本流へ流されていってしまうか、でなければ私たちのほうが水びたしになってしまうのではないかと心配して、給水設備を見にいきました。

以前も台風の時感じたことのある強い圧迫感と興奮に誰もが包まれていました。暑く、息苦しい空気、心にもからだにも害を及ぼすような悪い空気と闘っているみたいでした。お隣りの火山、浅間山は、1度ならず長いうなり声をあげ、地面が2度、3度ともり上がったと思うと、ついに嵐がやってきたのです。

すさまじい勢いで襲いかかってくる嵐は私たちをおぼりと呑みこんでしまいました。ひっきりなしに、家ごと飛ばされて、すっかり水におあわれな平地に投げこまれるような気がしました。夜のとぼりがおると、明りがキラキラと揺れ、壁がぎしぎしとたっているこの小さな家だけが、たった1か所まっくら闇の中に残されたの

ではないかと思われました。木の雨戸はぴったりと閉められ、強い風が吹き始めたころには、もう、しっかりかんぬきがかけてありました。こういう木造りの家は、屋根の下に強風が吹きこむと、開いたかさのように風によって飛んでしまうことがあるのです。万一、これ以上嵐が激しくなるようだったらすぐに避難できるように準備万端整えて、少しは構にもなりましたが、一晩中、起きていました。

風はひゅうひゅうとうなりながら、1本1本、柱に大きな音を立てて吹きつけてゆきます。あまり厚くもない石を土台にした木の柱が、こんな風の強さに耐えるなんて、できっこないと、何度も何度も思われました。日本式の家屋の安全はひとえにそれを支える柱にかかっているのです。壁は柱と柱の間に板を渡しただけという、うすぺらなものですから。柱には巧妙なしかけがしてあります。角柱の下にはそれぞれ石の台があって——土台はこれしかありません——床からその台まではせいぜい20センチくらいです。柱は四角ですが、底のところだけ丸くけずられています。石の台の受け口もやはり丸く、柱よりもゆすかながら大きめにできています。

地震や嵐の時に、柱がほんの少しだけ動いて、またすぐもとに戻れるようになっていっているのです。小さな、あるいは中くらいの震動がきても、こういう建て方の家はほとんど被害を受けることはありません。がっちりと建てられた家だとなまじ抵抗してつぶれてしまうところを、この柔軟性が抵抗を防いでいるからです。ただ強い地震の場合、そのすさまじい破壊力を持ってしても被害らしい被害を受けない家などあるものでしょうか。

このひどい晩にほんとうに家ごと飛んでしまうのではないかと思ったことが2度ほどありました。強い風が家の下に吹きこんでそっくり持ち上げるように思われたのです。長い時間がたちました。その間嵐が何度も狂ったように襲いかかってきましたが、これといった損害はありませんでした。家の両側を流れる川も水かさを増し、その怒号にまじって木が倒れる音や石が飛んでゆく音などが聞こえてきます。それでも家の中では床もぬれていないし、屋根も大丈夫らしいので、気を取り直して少し眠りました。明日の朝にはこの嵐もおさまりますようにと願いながら。嵐は数時間、猛威をふるっていました。針が一定に落ちついてくれないものかと、G氏がと

きどき、晴雨計を乱暴にたたき音が一晩中聞こえていました。晴雨計の針がひどく揺れるという現象は嵐の不思議のひとつです。左右に大きく揺れて、風が止むまでいつときも止まることを知りませんでした。やっと「晴れ」の位置に落ち着きました。空はまだ墨を流したようで、あたりは大水でしたけれど、きっと晴雨計にはわかっていたのでしょう。こんなふうには晴雨計が敏感になるのが、ほんとうの台風にはつきものの特徴だと聞きました。

猛威をふるった嵐もやがて弱まり、風がむせぶ音は長く尾をひいて遠のき、山々の間を伝わってゆきました。その音があまり恐ろしかったので、たとえば、すぐ目の前でなにか生き物が今にも死にそうに苦しんでいるのに、その姿は見えない、そんな感じがしました。音がますます弱まってゆき、ついに消えてしまうと、やっと、一晩中、荒れ狂う風の声におさえられていた、川の怒号がはっきりと聞こえてきたのです。

夜が明けるとすぐ——それにしてもこの夜明け、何てどんよりしているのでしょう！——勇敢な人たちは被害状況を見に出てゆきました。コックさんの大事な煙突は何ともない、といううれしそうな声が返ってきました。コックさ

んは小さいコックさんを一晩中屋根の上に座らせて、煙突をしっかりとおさえさせていたにちがひありません。が、ほかの物はそううまくはゆきませんでした。

給水設備はめちゃめちゃ。垣根のそばに対称に並んでいた数本の木はばらばらに倒れていました。峠を越える道路はあちこちでくずれ、村へ続く道は水をかぶってずたずたに切れてしまいました。本流にかけてあったうちの橋はぐらぐらに揺れた橋げた一本に支えられていました。ですから息を殺して、注意しながら這って渡らなければなりません。馬車鉄道と電信線はすっかりなくなってしまう、台風の後5日間というものは音信不通、主に食料を頼っていた東京からの支給は全くとだえてしまいました。

この家の庭師は、村で寝泊りしているのですが、嵐が一番ひどい時に何か役にたてることはないかとやってきてくれました。

例の小柄な警官、降旗の態度は勇敢なものでした。午前三時ごろ、強い風が吹いていましたが、彼が家のまわりを巡回している音がしました。雨戸のすきまからのぞいてみると、黄色いちょうちんが上下に揺れ、雨風をよけるた

め油布製の外套で完全武装して彼の姿が見えました。夜が明けてからも橋が危険な状態にあるので、すぐにも修理しなければならぬと伝えにやってきました。でも、二人の同僚とまじめくさった顔をして橋をにらみつけているところは見かけましたが、一歩たって足をかけてはいなかったのです。

配給のお酒や新しい衣類やたくさんの食料品が、一体どこへ行ってしまったのかよくわからないというも、なぜか心楽しく、宝島でごちそうが恋しくてしかたがなかった、あのベン・ガンの気持がわかるようでした。あたり一面、雨上がりの新鮮な、えもいわれぬ美しさに輝いていました。これしきの、とるに足りない災難をかこつなど、恥じるべきことなのです。

弱い風が吹いて、柔らかな白い雲が山のように積み上げられたり吹き寄せられたりしています。その切れ間に見える空はサファイアの青。いつもに戻った池に映るその姿。あたりには水の流れる音が満ちています。このまわりを何マイルも、まだ勝手気ままに流れているのです。

森をぬけて、木こりが仕事をしている音が聞こえてきます。それからずっと向うの緑なす山々に囲まれた、

石のほころの下あたり、ひとすじの青っぽい煙が、松の木の上へすうっと昇ってゆくのが見えます。いつか散歩の途中で出逢った炭焼きの一家がまた仕事を始めたのです。

台風のあとで山を降り、村を抜けて平地まで出てきました。ぐらぐらする橋も足場をさぐりながら渡ってゆくという危険も、ちょっと楽しかったものです。賢い犬たちはどうしても渡ろうとせず、バスという年老いたポインターのほかは、みんな抱いて渡してやらなければなりませんでした。先週の洪水のあとで、溶岩がゆるんで、道は瓦礫のうねが続いているようでした。何もかもひんやりとした感じで、そここに活気がみなぎっている——それだけで、この少々荒っぽい散歩も十分報われました。

村の向うまで行って、また村へ帰る途中、おもしろい光景にぶつかりました。一番村はずれの橋は嵐でかなり傷んだものの、見かけはまだちゃんとしていました。男の人が二人馬に乗って、橋の向う側にさしかかりました。真っ白い洋服をすっきりと着こなして、ヒーコック警部が夏場にかぶるようなヘルメットをかぶっています。このあたりの人はみんな見知っているのです。興味しんしん、

この見慣れぬ二人は一体誰かしら、と思っていると、先頭の馬が、勇ましく橋に足をかけました。するとその時、馬は橋を打ち抜き——少なくとも前足だけは橋につっこみ——くさった木に足をとられたまま、びっくりしていました。めかしこんだ馬上の見知らぬ人は、頭からころげおち、やっと立ち上がったところでした。見ると、よそゆきを着てめかしこんだ、うちのコックさんではありませんか。うしろは、コックさんとそっくりの服を着た、食料庫系の少年でした。少年はくると背を向けると逃げて行ってしまいました。どうしてかはわかりません。その時、たとえ私たちのほうが歩いていたにせよ、べつに馬を借りて乗ってはいけないということはないのですから。

気の毒なコックさんはとてもばつが悪そうでしたが、勇気を出して馬を引き上げると、私たちが渡る間、ゆきに寄せていました。私はコックさんにけがをしなかったかどうか尋ねただけで、振り返ってもう一度、馬によじ登ろうとする姿を見るのはがまんしました。

台風のあと、もう一度散歩をしました。この時は、碓氷峠を登って、山頂の村に、夏の間家を借りている友人を訪ねたのです。道のあちこちに裂け目ができてい

たので、それを乗り越えて、よじ登っていかなくてはなりませんでした。ぼろぼろの石灰岩は雨を含みやすく、表面の割れ目から雨が浸みこみます。水が1~2メートル浸みこむと、ほんのわずかな震動でも、その部分がそっくりはがれてしまい、谷間の急流めがけてくずれ落ちてゆくのです。そして山腹には生々しい傷あとが残ります。

さわやかな北風が顔に吹きつけるので、午後4時という、8月では一番暑い時間なのに、涼しく感じられます。川は勢いよく谷間を流れ、それをぬって道がくねくねと続いています。花々は光を受けてしっとり美しく、風景全体が午後の光に輝く、濡れた大きな宝石のよう。火山岩の山なみは柔らかな緑の丘に足をうずめて、ほのかに黄金色に包まれています。

峠の頂のあたり、空中に突き出た壁のような岩にそと出てみると、左手には平野が広がり、右手にはみかげ石の岩山、妙義山がそびえ立っています。そこに長いこと座っていました。口も聞かず、ぼろ色が金色に、金色が紫に変わってゆくのも見つめながら。誰かが言い出しました。

「30分もしたら暗くなってしまう。」

まだ光が残っているうちに、急いで急な山道を降りたのでした。

ほかの景勝の地と同じように、碓氷峠一帯の高原も日本の英雄の物語と縁があります。

倭建の命、幼名小碓やまとたける みことは景行天皇あうす けいこうの皇子みこでした。景行天皇は日本の年代史によると、西暦の71年に即位したとあります。物語全体は英雄、倭建の命という人物を中心に構成されています。そのいくつかは絵に描いたように生き生きとした話なので、お話しするにふさわしいかと思います。

日本の英雄がみなそうであるように、倭建の命も生まれながらに勇敢で向うみずでした。まだほんの少年のころに最初の手柄をたてましたが、その手柄というのが、兄の殺害。兄が宮廷の礼儀作法にそむいたというのです。天皇もそれをころよからず思っていたので、長男の死を嘆くどころか、これは歓迎すべき小碓の資質のあらわれ、と受けとめたようで、そのころある地域に住みつき、あたり一帯を恐怖に震え上がらせていた二人の恐ろしいならず者をひとりで征伐してこい、と小碓を遣わし

ました。

皇子は喜んで引き受け、この仕事を成し遂げるために勇気を奮い起したのはもちろん、それに劣らぬほど策略もめぐらしました。まだ若く、すうりと細いからたづきだったのも、少女だと言っても何ら、さしさわりはありませんでした。きらびやかな娼婦の衣装に身を包み、長い髪をうしろにたらすと、ある秋の夜、二人の盗人が酒盛りをしているほら穴へ、にこやかに入ってゆきました。あやまたず、二人の男は美しい少女を歓迎しました。皇子は深紅の衣に包まれて、かえでのようにあでやかで、張り出した枝の下をくぐっては、甘い歌を歌い、10月の星あかりの下、二人のために乾杯したのです。

しかし、乙女の柔らかな胸のうち、心臓が鼓動をうっているはずのところには、短剣がかくされていました。小碓が二人の間に座ったとき、その刀は稲妻のように光って空を切ったかと思うと、はや、一人の男の鮮血に染まっていた。男は死にました。相棒は恐怖におののき、ほら穴の出口へあわてて駆け寄りましたが、小碓の手は早くも男の着物をつかみ、刀はすでに背中を切り裂いていました。

「しばらく、皇子さま！」

男はあえぎながら言うと少年の足もとに倒れました。

「まちがいなく皇子さまだ。でも何のためにいうしたのですか。」

男を見おろして立つ深紅の夜の小碓。その糸紅はいっそう深く、振り上げた刀からは赤い血が腕をつたってしたたりおちる。皇子は盗人に言いました。自分は悪をこらす者、天皇が謀叛人のもとへ遣わされる死の使いなのだと。

「新しい御名をさし上げましょう」

瀕死の男は言いました。

「今まで、私と、そこに倒れている兄とは西国一勇敢な男と言われてきました。尊いお方、あなたに私どもの呼び名を譲りましょう。あなたこそ倭^{やまと}一勇敢な男と呼ばれますように！」

そう言い残すと、男は息^{やまとたける}絶え^{みこと}ました。

その日から、若き皇子は倭^{やまと}建^{たける}の命^{みこと}と呼ばれ、その名を汚すことは決してありませんでした。天皇は謀叛人を制圧し、野蛮人を征服し、蝦夷を支配下におくため、皇子を遣わしました。皇子は勇敢であり、同様に敬虔でもありました。務めに赴く前にはきまって、祖先の

太陽の女神、天照あまてらすに助けを求めていたので、しばらくの間、何ごとも順調に運んでいました。天皇は次にかつて1度も主君を持ったことのない東国の野蛮人を征伐し、その神々をも平定せよとの命令を下しました。

命みことは遠征を引き受けたものの、いつもなら戦いと殺戮と勝利のことも思っただけで心が躍るのに、今度ばかりは心が重く、沈んでいたのです。そこで伊勢の太陽の女神の社へ出かけてゆきました。叔母である倭姫やまとひめがその社のみこみことでした。倭姫は命のために祈りを捧げ、不思議な贈り物を与えて慰めました。それはみごとな刺しゅうのほどこされた絹の袋で、絶体絶命の危険にさらされた時でなければ開けてはならないものでした。

倭姫に別れを告げると、倭建の命は出かけました。武装した勇敢な供の者と一人の女人を引き連れて。この女人は命の妻、命も心から慕っていただけだったので、夫のためなら、骨折りも不自由も危険も、まさに花であり黄金であると考えていました。が、倭建の命は妻を冷たくあしらいました。媛が悲しそうな様子を見ると、こう言ったものでした。

「おまえが悪いのだ、弟橘おとたちばな。戦場で考えるのは戦いのこと。笑いと酒は畳の上でこそ。さあ、家へ帰るがいい。」

媛は帰ろうとはせず、自分に言い聞かせました。

「御主人様はまだ少しわかっていらっしゃらないことがある。あの方の貧しいしもべのこの身が教えてさし上げましょう。倭の姫は夫の座らぬ柔らかな畳に座りはしない。夫が危険に赴く時に笑いはしない。夫の刀が血にぬれる時、酒を口にしたりはしない。私は主人たる夫と共に戦いに行こう。」

そして、せいたくと安楽を捨て、戦いの衣装を着た弟橘媛は、飾りとしてはただひとつ、宝石をはめこんだくしも長い髪にさしただけで、皇子と共に出かけました。

進んでゆくと、尾張と呼ばれる地方にさしかかりました。そこにはこの世で最も美しい女人、宮簀みやす姫ひめが住んでいたのです。姫は戦いの衣など身につけたことがなく、着ているものといったらきらびやかで目もくらむばかり。奥の間で見る姫の顔はジャスミンの花のように白く、弓や槍を持ったことのない手はきゃしゃで百合の花芯のよう。その足は辛い務めに赴く荒れた道を見知らず、そのほほえみは浮気心をくすぐる美酒。

姫のかたわらでは、すりきれた衣に日に焼けた顔の弟橘媛は、まるで百姓の小娘、皇子は恥ずかしく思いました。皇子は媛が自分の妻だなどということは一言も言わず、媛は、皇子が宮簀姫とひそひそと話をしている時も、姫の庭を歩き、姫の酒を飲んでいる時も、黙って立っていないければなりませんでした。

弟橘媛は、皇子が宮簀姫と約束をかわしたことを知りました。野蛮人を征服して皇子の任務が終わったら、この同じ道を戻り、正式に結婚して、倭の屋敷をとりきるよう、連れて帰ろうという約束。ちょうど話をしている折しも、命は弟橘媛の視線を感じて振り返りました。媛が悲しそうに自分を見つめているのを見ると、命の心はひえびえとしました。が、皇子は悔やんだりしませんでした。命は、やさしさをこめて宮簀姫に別れを告げると、供を引き連れて去ってゆきました。弟橘媛は夫の楯を持ち、何も言わずにつき従いました。辛抱強い気高い女性でした。

ここで倭建の命が遭遇した不思議な冒険をくまなくお話しすることはできません。ただ、たくさんの冒険をしたとだけ申し上げておきましょう。その間ずっと弟橘媛

は忠実に夫に従い、その心を悲しませたり、勇気をくじくようなことは一言も口にしませんでした。

ついに、相模の地までやってきました。土地が海の中に突き出ていて、その中に入江への入口となる村がありました。供の者は命の乗る船を捜しました。倭建の命はばかにして言いました。

「こんなものは海ではない。たかが小川ではないか。やろうと思えば跳びこえることもできよう。」

この侮辱を聞いて、龍神と海の神々は怒り、激しい嵐を起こしました。倭建の命とその妻と供の者を乗せた船は荒れ狂う嵐の中、波にもまれて木の葉のよう。今や死と背中合わせの命は、海の神々をあなどったことをいたく後悔しました。その時、弟橘媛が言いました。

「だんなさま、私が神々を鎮めましょう。あなたの輝かしい、尊いお命をお救い申し上げます。」

媛は船の寝間の畳を海に投げ入れ波に浮かべさせると、船べりに立ちました。日に焼けて、戦いの傷によごれた顔は、悲しみと風に洗われて白く、瞳に稲妻を映して立つ。その姿は、天の鏡に映った太陽の女神さながら。両の手を頭上で固く握りしめて叫びました。

「まことに、畳の上こそ私の居所、あなたが おっしゃった
とおりで ございます。」

そして、海めがけて 跳び込む 媛を 畳が 受けとめま
した。みるまに 波に 運び去られて 遠ざかる 媛の姿を 稻
妻が 照らし出しました。嵐は 止んで、海は 風ぎました。
海の 神々が 怒りを 静めたのです。

倭建の命は おし黙ったきり。そして 一言も しゃべらぬ
まま、一行は 彼方の 地に 上陸しました。これまでに ない
ような 戦いぶり、野蛮人、蝦夷の 住む 土地の 奥深く
入りこみ、その 神々も すべて 征服して しまいました。相模へ
帰る 途中、碓氷峠の 頂で 立ち止まると、倭建の命は 弟
橘媛が 自分の ために 命を 捨てた 海の ほうへ はるかに、
悲しげに 目を やりました。そして、自分が 裏切った 媛の 忠
実、自分が 拒んだ 媛の 愛を 思い、声を あげて 泣きました。

「吾妻、吾妻や！（ああ、我が妻！）」

それ以来、この山々から 海に至る 地方は、今日まで 吾
妻と 呼ばれているのです。

一方、弟橘媛は、嵐に 連れ去られ ときり、二度と 再び
その姿を見た 者は ありませんでした。宝石を 飾った 媛の
くしだけが 海の 王の 娘の手で 岸辺まで 届けられました。倭

建の命は その 決に、媛の 思い出にと、大きな みたまや
も 建てました。

倭建の命は どうなったの だろう。バルベリーノの 松の下
で、この 便りも 声に出して 読み、やはり 平地の かなた、海
の方へ 目を やりながら、あなたは おっしゃる でしょう。そう、
倭建の命は やはり 男でした。宮簀姫のもとへ 帰ったのです。
が、その 姫も もう 以前ほど 美しいとは 思われ ませんでした。
命は また 別の 野蛮人と 戦う ため、すぐに 出発しました。
生まれながらの 戦士は 殺戮の さなかにはこそ、最も 生き生
きとするのです。

倭建の命は 32歳で 七くなりました。そのころ ^{みこ}命を むし
ばんでいた、重い 病が 癒される ようにと 祈禱して もらう ため、
叔母 倭姫を 頼って、伊勢の 社まで 必死で 戻ろうと
していた 途中の ことでした。

たどり着かない うちに、命は、尾張の 近く、尾津の 地
で、1本の 松の 根かたに 倒れ、死の 苦しみに あえいで しまし
た。死の 床で 歌を 詠み、その たった 1本の 松の木を 兄と呼
び、喜んで 御剣と 戦士の 衣を 預けました。この 心ある
松の木から 命は 力を 得た ようでした。さらに 這って 進
んで ゆきましたが、伊勢の 社には ほど 遠い、木も はえて

いない平原で息絶えたのです。供の者が何人かそばについていました。その一人に命じ倭建の命は、祖先にあたる太陽の女神の社へ剣と最後の征伐の戦利品とも届けさせ、形見にと残しました。別の一人を使者として父親のもとへ送りました。命令はすべて成し遂げられたこと、それを自らの口で知らせられないのが心残りであること、そしてこの最後の言葉を伝えるために。

「もう命も惜しくはない。この心地よい、広々とした野が私の死の床。」

1890年9月 軽井沢

最初の台風からちょうど8日目、その第2弾がやってきました。前の台風で、道のうめ土はくずれ、荒石はくずぐずにゆるむという状態だった山々は、この台風があばれ回ったおかげでめちゃめちゃになりました。今度ばかりは、うちの橋もすっかり壊れてしまいました。ところが運よく、庭のはずれ、生い茂った生垣を抜けて、流れが少し狭くなっているあたりに、小さな橋があることがわかったのです。壊れた橋は、今、かけなおしているところです。その間、みんなにこの小さな橋を渡らせてあげなくてはなりません。これは炭焼きのすまゐへ続く小道に出る近道として作られたものです。霧の深い夜とか酒をすごしたあとなどは、道を見わけるとに難儀します。

前の日に雨が降ったので、だいぶ雲の多い晩、夕食のあといつものように縁側に出ていると、ちょうちんの明りが

ひとつ、庭の道のはずれに見えました。たいそう興奮している様子です。ちょうちんがあんなふうには奇妙に動くのは見たことがありません。まず空中で揺れ、それから地面まで降りたと思うと、次には左右に揺れるという具合です。だんだん近づいてくるのをみると、ちょうちんはだらりとぶらさがっていて、茶色い足を照らし出していました。その足はあっちへよろよろ、こっちへふらふら、ひどい千鳥足。しっかり立ったかと思うと、また同じことを繰り返すのです。この珍しい生き物が茂みの間に見えかくれしながらやってくるのがおもしろく、口も聞かずに見ていました。

縁側の踏み段の近くまでやってくると、この生き物は正体を現しました。まるでちょうちんの放つ明りに照らし出されたのは、たくましい身体に粗末な着物、そのてっぺんで、うすら笑いを浮かべている眠たそうな顔。その顔は楽しそうに右へ左へと動いています。顔色は古くなった材木の色そっくり。それはしたたかに酔っ払った、炭焼きのおじさんでした。

「いい家だ」

と彼は言いました。

「晩松軒(村の宿屋)よりもいい」

「何が欲しいんだ」

G氏が尋ねました。

「家へ帰る道をまちがえたようだね。」

「いや」

とこの訪問者は、頭をできるだけおごそかに振って答えました。

「まちがえたんじゃない。家を探した、家が見つかった、まもなく雨になる、ここにいて」

縁側に腰をおろすかと思えた時、召使いたちが出てきました。おじさんは興奮して大声でしゃべっていたので、その耳慣れない声を召使いたちが聞きつけたのでした。

「道に迷ったんだ」

G氏は繰り返しました。

「ここは宿屋じゃない。正しい道へ出るまで人に送らせよ」

林蔵とウマはひどくおもしろがっているふうで、両側からこの迷える子羊の腕をとりました。林蔵はちょうちんを持ってやり、二人はおじさんを送って道を降りてゆきました。おじさんは夢中になってずっと晩松軒の話をしつづけていました。その話だと、晩松軒で結婚式の宴が開かれ、ほんのちよっぴり——たいた、ほんの

ちょっとだこと！—— みんなに お酒が ふるまわれたのだそうです。ほんとうに おじさんは 帰りたくなかったのです。ちゃんと お供までしてもらえると。それに。それというの、ここが 晩松軒よりもいいから、晩松軒よりもずっといいから なのでした。おじさんの声は 遠くへ消えてゆきました。10分くらいして、二人が 帰ってきて言うには、ちゃんと 正しい道まで連れていったから、もう まちがえる こともないでしょう、とのことでした。それに雨 が降り出したので、酔いもさめる だろうと 考えたのです。

雨も、縁側の 広いひさしの下までは 降りこんで きます。それで、中に入って 居間の 熱いランプの 近くに 座るのが いやで、いろんなことについて おしゃべりをしながら、しばらく 縁側に 腰をおろして いました。ぴちゃぴちゃと音をたてて、池の上にも 雨が降っています。木々も おしゃべりを 始めました。枝から枝へ 水滴が 落ちるくらい雨が 降るときは いつも そうですね。あたりは たくさん の百合の花から 立ちのぼる 甘い香りに むせかえらんばかり。これこそ 山の 真夏 という 感じ です。この百合は、庭師が 大きな 束にして、広口の 花びんに 差し、玄関口と 縁側においた ものです。高さは 1メートル くらい。私

たちは、ピンクや茶色や黄色の、色とりどりの百合の花のことを話して いました。すると、また例の 気違い じみた ちょうちんが、さっきよりも もっと ふうふうと 家の方へ やってくる のが 見えました。近づいてくるにつれ、濡れた小石の上を ひきずる ような 重い足音が、何か ぶつぶつと 晩松軒のことを 言っている 声に 混じって 聞こえて きました。またもや、あの 炭焼きのおじさんが 現れました。1時間前よりも ますます ひどい 千鳥足で、濡れて、すべりやすい 道を なんだか いぼっている みたいに 歩いて きました。

「いい家だ。ひどい雨—— びしょぬれだ。明るくて、暮らすには いい家だ。晩松軒よりも いい！」

「すぐに 帰りなさい」

と G 氏。彼は おじさんは 見た目ほど 酔っていない と思った のでした。

「まちがいをおかしていることも わからないほど、だいたい たくさん 飲んで きたんだな。」

「まちがえることは 罪じゃない」

炭焼きのおじさんは 答えました。

「やめろ (と、これは腕をつかんだ林蔵に向って言いました)、帰らぬぞ。なんで貧乏人は追い返されなきゃならぬえんだ。なんで貧乏人は道に迷ったからって怒られなきゃならぬえんだ。道に迷うのは悪いことか? そうじゃない! ここにいるぞ、ここに!」

おじさんがさかんに抵抗するのもかまわず、召使いたちが断乎として連れていこうとした、ちょうどその時、降旗のちょうちんが公務を遂行すべく、道を急いでやってきました。その帽子と白手袋が目に入ると、かわいそうな酔いどれ侵入者は急に元気がなくなり、自分のみじめな身の上を思って泣き出しました。おじさんはとうとう連れてゆかれましたが、泣きながらも、まだ晩松軒よりもずっと、ずっといいと言っていました。召使いが戻ってきて言うには、あの厳格な降旗が、警察署の畳の部屋に床をとり、あわれな罪人を気持よく寝かせてやったということです。あとになって聞いたのですが、おじさんは翌朝、元気よく、上機嫌で目ざめると、朝日のなかを、無事に家へ帰っていったそうです。

うちの庭の入口は道の一部のようにみえるので知らない人やお遍路さんがしょっちゅう迷いこんで、家の

前までやってきたりします。その中には家を外国風のホテルだと思える人もいます。ある晩、少し遠出をして遅く帰ると、こんなことがあったと聞かされました。

二人の英国人紳士が馬に乗ってやってきて、家の中へ入り、部屋を二つと夕食を注文したというのです。Dを宿屋の主人とまちがえたのです。自分の同国人の私邸に侵入したのだとわかった時には、二人ともすっかり気が転倒したようです。

日光の奥、中禅寺湖畔にすてきな山荘をもっている友人が話してくれたことがあります。去年の夏、疲れ果ててかっかした英国人が二人、友人の家へ突然入ってくるなり、めんくらっている召使いに、朝食を12人分、30分以内に準備しろと言ったのです。他の人たちは道で待っている、と。オムレツにビーフ・ステーキにキンボールに、それから何だったか知りませんが、とにかくそういった物を食べようというのです。彼らがこんな細かい注文をつけたところには、日本人の「少年」も英語の単語を三つほど思い出しました。彼はていねいにおじぎをしてみました。

「これ、洋風、家。」

不慮な侵入者はそれ以上何も言わず、逃げていってしまったそうです。たぶん、道を数百メートル上がったところにあるすばらしい宿屋で望みのものにはりついたことでしょう。

さっきお遍路さんのことに触れたので、そのことを少しお話ししましょう。今頃になると、お遍路さんがおおせい群をなしてこのあたりを通ります。それは信仰篤い人のなかでも、他に例がないほど、見た目にも美しく、またほがらかな人たちです。

峠を登る道に古い木が倒れて、気持のいい腰かけになっているところがあります。そのうしろから道は険しくなり、山峡の方へ折れると両側に森がうっそうと茂っています。風のない日の午後、ここに腰かけて休んでいると、遠く山あいではチリンチリンと鈴の音が聞こえる——気のせいでしょうか。あまり遠くなのでときれときれで、ほんとうに聞こえたとは思えず、もう一度聞こうと耳をすましてみます。聞こえる、ほら、少し近づいてきた——また近くなった。少し上へ行ったところで、道は台風のためにくずれています。今、誰かそこを歩いて、ざくざくになった小石が斜面をすべり落ちてゆく

のが聞こえます。今度は詠唱も聞こえる。荘厳な鈴の音も。

するとすぐに、見慣れぬ姿の一行が緑の葉の間から現れ、山道をぬうようにして降りてゆきます。今日の一行は9人。みな長野の善光寺へ向うのです。身にまとっているのは、聖なる山々を登るお遍路さんの装束。一行の中に女の人はいません。先頭は背の高い、目鼻だちの整った人で、まっすぐな木の櫃も背負っています。まっ白な櫃には見たこともないような文字がくろぐろと書かれています。着物は純白で、それにも聖なる文字が染めこんであります。うしろに続く人たちも同じ恰好です。ぴったりした脚絆も純白で、足もとは足袋とわらじ。わらじは、どこの茶店でもただ同然の値段で買うことができます。山道を歩くと一日ともたないのです。着物のすそははしよりあげて綿の帯で止めてあります。きつくしめられた帯には、お金やパイプやその他持ち歩かなければならない貴重品が入っています。それから、一行の訪れを私たちに告げてくれたあの柔らかな音色の鈴も下げられているのです。

頭には大きなきのこのような笠。笠の部分は、とても

軽いすげの葉で編んであります。それに竹の輪をつけて、頭にかぶるといふより、のせるわけです。竹の輪から軽い棒状のものが広がって笠を支えているのです。こうすると白い笠の下を風が吹き抜けます。笠にも着物と同じ文字が書かれています。これはおそらくその人の村や地方のお遍路の講の名前でしょう。

肩にはござという敷物を一枚、ひもで首からかけています。これは雨合羽でもあり、座ぶとんでもあり、夜具でもあるのです。手にした杖には名前がいくつか焼きつけてありますが、これは巡り歩いた寺社の名前です。腰には水筒をぶらさげていて、それに、聖地にはよくある神聖な湖や池の水を少し入れて、家へ持って帰ることができます。袖もすそと同じようにひたたりと縛ってあります。こうして細かく述べると、奇妙な恰好に聞こえるかもしれませんが、これほど軽やかにみえ、暑いさなか、長い道のりを歩くと目的にかなう恰好はないのです。

一人の人の装束を説明しましたが、これで他の人の説明したことになる。みんな全く同じ恰好です。これが聖なる峰々に登るための定められた装いでもあるからです。森の木々の緑の中から現れた一行は絵から抜

け出したかのようで、涼しくて気持ちがよさそうにみえました。

先頭の整った顔たちの男の人は、まっ黒に日焼けして健康そうでした。輝く目で私たちをももの珍しそうに眺めましたが、さすがに、自分が音頭もとっている詠唱はやめませんでした。詠唱は同じ文句の繰り返しになっています。

「^{ろく}六^{こん}根^{はう}清^{じょう}浄、^お御^{やま}山^{がい}快^{せい}晴（私たちの六根が清らかであり、聖なる山々の天気は快晴でありますように）。」

そのうしろは男の子。次が老人。この人は数多くお遍路をしてきたに違ひありません。最後のお遍路もそろそろまちかかもしれません。それから景気のよさそうな商人。そのうしろは行者。顔色は青白く、表情ひとつ変えません。

お遍路の講は、田畑で働く人々と同じく、商店や工場で働く人たちをも派遣し、聖なる道をとともに歩み、忙しすぎたり、年もとすぎたり、弱すぎたりして、自分でお遍路をすることができないという、他の村人や町人には、御利益を持ち帰ってもらうのです。

お遍路の講は国中どこにでもあり、どんなに貪しい人でも聖域を訪ねることができ、その道みち、非常な気分転換と楽しさ、おもしろさを味わえるようにする団体なのです。何百、あるいは何千という人々が講に加わって

います。

この講は、自分の属する宗派(宗派は無数にあります)の權威から創設の許可をもらう意志があり、そうするだけの精力と仲間を集めるに足る人格をそなえた人なら、誰がどこで始めようとかまいません。数銭だけ、わずかな入会金が必要、会費は年間8ないし15銭です。経費を全部支払ったあと、残ったお金はくじ引きで分け、当たった人(おそらく全体の2~3パーセント)はその賞金をお遍路の費用にあてるのです。もちろん自前でお遍路に行くことはいっこうにかまいません。

講の長^{おさ}が必ずお遍路の先導者となり、その費用は当然のこととして支払われます。長は道を心得ていて、寺社もその住職も宿屋の主人も知っています。が、実際の支払いには心配しなくてもいいのです。そのために選ばれた会計係が、一切の勘定をしなければなりません。宿は割り引き料金でお遍路さんを泊めるので、長い行脚でも費用はごくわずかで、私たちヨーロッパ人の愚かしい俗悪なせいでくは照らしてみれば、一体使ったのかどうかもわからないくらいの金額です。銭の単位を出ることがないのに、それで日本人は何週間もの旅をなんとか

まかなうのです。

そうして聖なる場所とか歴史的な場所(この国では両者が同じであることが多いのですが)を次から次へと訪ね歩き、お遍路の季節である夏の数週間で、みな同じ目的に結ばれた、数えきれないほどの人々と知り合うのです。

お遍路は徒歩で行くので、季節は一般に夏が選ばれます。天気がよく、期間も長ければ、国中を巡る楽しみもひとしおだからです。実際、山頂の寺社などは7月中旬から9月初旬の間にはしか行けません。その間は休泊所が設けられ、道は修理され、茶店も客の受け入れ体制を万端整えます。これを山が「開かれた」と言います。聖なる峰は数あるなかでも、何とんでも富士が一番で、登るのも一番たいへんです。

お遍路の講には女の人も入っているし、女の人だけの講もあります。女の人が山の頂上に登ることは許されません(許されませんでした、というほうがいいかもしれません)。女は、山頂の聖なる土を踏むにはあまりに下等で、あまりに卑しい物質でできていると思われており、山頂からは少し離れたところで足止めされたのです。その結果、女の方は低地の寺社に集まるようになり

ました。そこでは歓迎され、くつろいだ気分になることができるのです。

彼らはみな、ここからは西の方角にあたる、長野の町にある善光寺へ向うのです。ほとんどの人はすっかり年をとってしまっていますが、その晴れやかな顔と楽しそうなおしゃべりからして、家事をみな嫁に任せて、今は心の赴くまま、気ままに旅を楽しんでいるに違ひありません。

1度、召使いの一人にその母親のことを尋ねたことがあります。彼女がどのように時間を過ごすのか、どんな仕事をしているのか、と。

「仕事はしません。もう働かないのです。年をとりすぎています。お寺へ行ったり芝居小屋へ行ったり。とても幸せですよ！」

お遍路さんの一行に混じっているおばあさんは、よく孫を連れていきます。12~13歳くらいの元気のいい少女で、おばあさんに付き従い、私たちのような異人を見てはびっくりしています。この年老いた婦人と幼い少女が、持ち物を全部、小さな包みにして——それにしてもほんとうに小さな包み！——背負い、どれほど長い距離を歩くことができるかを思うと、驚いてしまいます。

快適な夏の間は、国中、西も東も南も北も、道という道は、自分の宗派の寺社と、それに他の宗派でも御利益があると思われる寺社を巡り歩く人々の陽気な集団で、活気に溢れるのです。宗教的な観念が奇妙に入り混じった状態では、宗派と宗派が混同されるのです。ただし教義においてではなく、その人個人にとって、一人の人が同時にいくつもの宗派に、どれにも偏見を持たずに属することができます。信心深い人のなかには、いつもお遍路をして時間を過ごす人もいます。が、こういう信心深さにしばられることはなく、行脚の道みち、どんなささいなことも心から楽しんでしまうようです。

お遍路を終えて村へ帰ると、かなりの尊敬が寄せられ、その人は一生涯、お遍路をしたことがない人よりも高い評価を受けることになるのだらうと思います。お遍路は神聖さの証しであり、家にいる者の感謝を受ける権利でもあるのです。はるかな地の社に2~3人の人が詣でて授かためぐみは、その人たちを聖域へと送った、寛大な会員たち一人一人に、豊かにもたらされると思われていたからなのです。

笑いながら行脚する日本のお遍路さんたちと、海をへだてた中国で出逢う人々とは全く違います。中国では、誰も決して笑いません。寧波^{ニンポ}の近くに、たいそう神聖な社があって、毎日毎日、毎年毎年、あわれな年老いた女たちがやってきます。子供の頃の「黄金の百合」のような足も、年をとった今では当然のことながらあとかたもなく、むくんでひび割れてしまい、苦しげによろめきながらやってくる女たちは涙ながらに祈り、慈悲深い神々に嘆願するのです。抑えつけられた女の^{さが}性はもうたくさん、次に生まれ変わる時には男として生まれますようにと。

ある日、お遍路さんの一行をとおしてあげようと、道端によけて立っていたことがありました。そのなかの一人は、奇妙な服を着た青い目の生き物、野蛮な外人の女を初めて見たのですっかり驚いてしまい、私の前を行き過ぎることができないくらいでした。道がでこぼこだったので、その男の人は私の足もとあたりにひどくつまずきました。それを見た一行は腹をかかえて笑いました。

「あのおばさんに見とれていたからだよ」

そう言って起き上がると歩き続けましたが、姿が見えなくなるまでこちらを振り返り、私にじっと視線を向けた

ままでした。まるで私がその場できつねにでも変わるのではないか、あるいは日本の化け物の話にでてくる蛇女のように、首が伸びて自分を追いかけてくるのではないかと思っているかのようでした。

ある日、午後のお茶の時間に外に出て座っていると、お遍路のおばあさんが訪ねてきました。すい分年をとっていて、半分、目が見えないようでしたが、それにもかかわらず、一緒に来た二人の若い女の人たちのリーダーでした。みんなお百姓さんで、焼けつくような太陽の下、ずっと田んぼに立っているので、顔も手足も日に焼けていました。おばあさんはすそを上の方まではしゃって、頭には青い手ぬぐいをいろっほく巻いていました。

道をやってくる時、おばあさんは、あの迷い込んできた炭焼きのおじさんと同じ気持ちを味わっていたようでした。こんなふうには叫びつづけていましたから。

「なんてきれいなんだろう、なんて立派なんだろう。この立派で、きれいな家はどなた様のものですか」

召使いが説明すると、外国の家や庭を見るのはこれが初めてだと言いました。それから、連れともども、もうしばらくここにいて、見せてもらってもよろしいでしょうか、と。も

ちろん、いいですとも!

おはあさんは、このおもしろい小さな敷地の中を歩き回って、とても興味深げに、台所の設備を見ていました。それから、あの立派な長いしっぽの立派な動物は、ほんとうに立派な犬なのか、

「まことに、そうですか？」

と尋ねていました。

この異国の尊敬すべき人たち、ほんとうになんてすてきな人たちなのでしょう!

1891年8月 軽井沢

この「平安の館」は、去年よりも いっそう涼しく、緑が深いようです。そして、もう、わが家と云った雰囲気かただよっています。今日はしっとりと雨に濡れたわが家。梅雨も今日で終りかと思われれます。ここ、森と山の国は恵みの雨をたっぷり吸いこんで、耳をすますと、いまに野の花は咲き乱れ、森はうっそうと茂り、芝はあおあおと伸びる、そんな気配が感じられるのです。そうなればこの陰うつな雨の時期も救われる、とはいえ、その雨の時期も私たちなりの方法で楽しんではいらるのですが。

千一フは相変わらず書きものをしていす。もう午後5時をまわりましたが、今朝9時ごろから辞書をひく音が家の向うの方で聞こえています。G氏と書記の岡本さんが、ああでもないこうでもないとい中国語の単語の意味について話し合ったり衝突したりしているのです。高価な辞書もこの長雨では草や木と同じように伸びきっ

てしまったに違ひありません。

犬たちさえおとなしく声もたてず、人にふんづけられ
そうなところに、そんなことはおかまいなしという顔をして寝そべっています。気の確かな人なら、今日あたり、帽子と杖もとってそのあたりをひとつ走りしに連れ出してくれ
たりなんかしないと知っているのでしょう。あきらめきって外を眺めています。きれいなゴードン・セッターが1匹いますが、これはフロッピー・フローの長男です。フロッピー・フロー
というのは、一種のもぐりのあざらし猟船からもらい受けた、
れっきとした英国民です。その船で殺傷事件が起り、船長が投獄される時、飼っていた犬たちの幸せを思い、周到に手配をしたのでした。このゴードン・セッターが、町に残してきた母親と妹から遠くはなれて、山あいの冷えびえとした夜明けにはじめて目を覚ました時、哀しげに鳴き出しました。雨が犬小屋に降りこんでいます。慰めてやろう
と思い、まだ明けやらぬうちにそっと行ってみると、私より先にDが来ていました。どうしてそんなに鳴くのかはわかり
きるまで、Dはこのうるさい小犬に腹を立てていたようでした。それがわかってからというもの、誠実なDは一日中、自分を責め、かわいそうなゴードンの小犬に謝ってば

かりいました。まるで四つ足の小犬ではなく、二本足の赤ん坊でもあるかのように扱うのです。

誠実な人がもう一人、うれしいことに、私たちのところへやってきました。それはあの親切な警官、降旗です。これまで、このわれらが英雄から音沙汰がなかったわけでは
ありません。お正月に夫がちょっとした贈り物をした時、次のような英文の礼状が届きました。

フレーザー閣下

拝啓、新年の御挨拶として下された閣下の御親切な贈り物に対し、心から感謝いたします。贈り物はそれ自体価値のあるものです。しかし、それが閣下の贈り物であるということ
で、わたしには二重の価値があります。

敬具

長野県長野町416

降旗より

この手紙を読んだ時、降旗の英語はたしかにうまくなった
と思いました。こんなさみしいところではどうしても護衛が必要なので、町をたつ前に、今度も降旗をよこしてほしいとたのみました。ですから、彼はもう退職してしまったの

で、私の願いはかなえられないという返事が来た時は、ひどくがっかりしたものです。外務省も残念がっていました。降旗の身に何が起ったのかと尋ねると、法の権力をふるうのがいやになり、ここから約30分くらいかかる新軽井沢駅で鉄道職員をしていると聞かされました。それでここへ着くまではそのことはもう何も考えませんでした。

私たちの旅は例によってこの上なくたいへんなものでした。汽車、人力車、かご、そして「二本足の馬」——徒歩でゆくことをうちのばあやはこう呼んでいました——どれかしら一行のそれぞれが味わうわけです。それに言うまでもなく馬車鉄道という名の踊るマッシュ箱。何ももってしても私に、それに乗ろうなどという気を起させることはできません。もっとも、大事な荷物をのせることは承知しましたけれど、荷物がたくさんあったので馬車がいっぱいになってしまい、場所は一人分だけ、少年一人が乗れる分しか残りませんでした。馬車鉄道の経験のない少年が、知らないからこそ勇敢にも馬車にとび乗りました。去年は町に残されていたので、1メートル近くも黒い泥に埋まった、曲がりくねった険しい山道のこわさを知らないのです。去年、経験ずみの召使いたちは一様に

そっぽを向き、1度味わった苦しみも再び繰り返すよりは、山道がどんなに険しかろうが、4時間歩くほうがよいと思ったのでした。

いよいよ横川を出て山にかかったのは、おひる過ぎでした。町中を捜しても人力車は3台しか見つかりません。私のかごは東京から持ってきていました。それから一所懸命捜して、私の侍女のために、かごとかごかきを二人、別の村から連れてきました。そのかごは道具箱にしてはかなり大きいというくらいのものでしたが、彼女はとても要領よくめぐりこみ、にっこりと笑いました。物ももらう時も叱られる時も、どんな時でも彼女はにこにこしているのです。

犬はほとんどG氏と一緒に先に着いていました。私たちと一緒にだったのはティップと巨体のゴードンだけ。ゴードンは東京からずっと鳴きどおしでした。汽車の中では、前にも乗ったことのあるティップでさえふさぎこんでいましたが、今は2匹とも泥にまみれて濡れた草の中を楽しそうに走っています。4~5キロも行ったでしょうか、犬たちはいんぎんに、ただし断乎として、乗せてほしいと頼んだものでした。人力車の一行とまだ一緒に

したので、ゴードンは だいにチーフの車に乗せられ、ティップは私のかごの小さな足掛けの上に乗りました。犬がよくやるように、へりから身をのりだしてうまい具合に立ち興奮して、しめった山の風に鼻をくくんさせていました。きっと風によってぎじやうさぎのにおいが運ばれてきたのでしょう。そのうちに、ふらっとよろめいたと思うと、へりのところに倒れこんでしまい、ひっぱり上げてやるまで、苦勞人ならぬ苦勞犬といった恰好で、しばしひもでぶらさがっていました。

寂しい山道を登るにつれて、しめった細かい霧がおりてきてベールのように私たちを包み、行列の先頭の人たちが、うしろの着にははばかに大きく、ぼやけて見えました。山に生息する灌木や名もない花々がほろ苦い香りをただよわせています。男の人の肩にかたがれて高いところにいる私が、葉の間をこするようにして過ぎてゆくと、たくさんの枝が揺れて、首すじに冷たい雨のしずくがあたります。

ついに車で行く者と足で行く者が別れる地点にさしかかりました。チーフは人力車道を行き、かごに乗った私と歩いてゆく人たちは別の道を登り始めました。歩きの人たちの中にはもちろん、お松の夫の林蔵もいました。林蔵は、私が出かける時にはいつもお供をする資格が

自分にはあると思っていますのです。それに「小さいコックさん」。これはおかしな太った少年で洋服をとっても自慢にしていました(少年の上司である「大きいコックさん」は少年の半分くらいの体格です。この人はもう先に行っていました)。しんがりはカネという芸術家はだの食料室係の少年。少年は道みち、うちの英国人の女中頭、D夫人のことをほめそやしていました。夫人のために彼は、たらいや古くなった箱の中に、橋や滝、小さな人間と小さなとうろうや金魚、高さ7~8センチの松の木をあしらって、みごとな日本の庭をこしらえるのです。それは想像力とみごとな細工が生んだ珍品です。彼の音屋の一角は常に、美術制作の場であり、かけてある絵や飾りものは、全く文句ない位置におさまっています。カネは召使い部屋では一番背が高いのですが、その朝、大きなヘルメットをかぶり、飾りボタンも揃った、まぶしいほど白い軍服に身なりを正して、駅に現れた時には、笑いすぎて息がつまりそうでした。その服装は頭の前からつま先までそっくり、英国国家公務員、ピーター・ヒーコック警部をまねたものだったのです。少年が遠くの方を歩いているのを見た時、一瞬警部かと思いました。

濡れた山道を長いこと登ったあとも、カネはやはり小ぎれいでまぶしいばかりに見えました。私のあとをついてくる気の毒な人たちはどうしているかしらと、うしろを振り返ると、いつも、晴れやかな笑顔がずっと続いているのが目に入ります。一人また一人と うしろへ行くにつれて、あたりを包む霧の中へ じだいにぼやけてゆく——まるであの不思議の国のチェシャー・キャットの笑い顔みたくに。

峠の頂はもうすぐそこです。前を向いていた私は連れたちのことを忘れて、2時間以上も、すてきな霧に包まれた孤独を楽しんでいました。と その時、急な坂道を2〜3メートル登ったあたりに、しっほが ゆさゆさと揺れて、気違いじみた騒ぎが見えてきました。続いて灰色の霧の中には人影が見えたと思うと、すぐにそれは犬たちに囲まれたG氏だということがわかりました。するとたちまち、従軍記者流に言えば、隊列は解決不可能の混乱状態に陥った、ということになるでしょうか。ダックスフントが3匹、セッターが2匹、それと老ポインターのベスが跳びついてきました。それから有頂天になって互いにじゃれあっているのです。犬たちの騒ぎが少しおさまると、霧の中にはもうひとつの影が認められました。役人姿の影——

警官の制服も着て気をつけの姿勢で立っています。

「降旗？」

「いえ、まだです」

G氏が言いました。

「こちらは この地方の警部です。降旗なら家にはいますよ。彼にもう一度逢いたいという御希望を聞いて、温情的な政府は、降旗に、鉄道の仕事をやめて、お国のためになる職に戻れと命じたのです。もちろん、彼はそれに従いました。だからこの夏はずっと、降旗をおそばにおくことができますよ。」

そのとおりでした。山荘の見えるあたりまで来ると白と金に着飾った降旗が部下も一人従えてこちらへやって来て、芝居がかったしぐさをすると、勝ち誇ったような声で叫びました。

「降旗でございます！」

もちろん、私も彼に逢えてとてもうれしいこと、夏の間、ついていてもらえると聞いて、喜んでいることを伝えました。平安の館に入る時、降旗はもったいぶって私たちを護衛し、階段のところで、勇気もふるいおこすと、たいへんな努力の結果、あえぎながら叫びました。

「わたくしの — 護衛 — 英国公使館 — 軽井沢！」

この文句が気に入っているらしく、降旗は夜にまたやって来て、同じことを言いました。それから、夏の間、このあたりに家を借りている幾人かの友人にも言っているのを聞きました。ただ友人たちに対しては、頭をはたらかせて、「英国公使館」という代りに「外国の皆さま」と言ったのでしたけれど。

軽井沢からは去年たくさん お便りをさしあげましたので、今回は お話しするような目新しいことは ほとんど ない ようです。あるとしたら、去年は しなかつた 遠出も 2度した という こと だけ です。一つは 入山峠へ、もう一つは 小諸へ、山奥の 仏教の 僧院を 訪ねました。

まず 入山峠の ほうから お話し しましょう。外国人 たちは そこを「伽藍の岩」と 名付けました。覚えて いらっしゃる でしょうか、この 私たちの 家は 平行に 走る 2本の 山脈の 間に 広がる 平地の 北の 端に あります。この あたりには 竹も 椿も しゅろも 生えて いません。松と ナラと 栗が 山腹を おおっている だけ です。でも 百合の花は たくさん 咲きます。今、この 家には みごとな 花が 溢れる ほど あって、温室の よう です。白や 緋色や 黄金色の 百合、キキョ

ウ、あじさい、6メートルほどの木に咲くくちなしに似た華麗な白い花。こういった花をほかにも庭師が、毎日、森からとってくるのです。庭に植えられているなけなしの花は、こういう花と並べてみると、貧弱にみえます。

申し上げたとおり、この家は、休むことも知らない火山、浅間山のふもとの丘陵地帯にあり、浅間はここからの眺めの背景になっています。この辺から傾斜しはじめの土地をしばらく降りてゆくと花咲き乱れる平らな谷底に出ます。それは幅6キロ余り、南の方へ10ないし11キロほど伸びています。その先は険しい台地となってくだり始め、長野、直江津、そして海岸線へと続きます。入山峠はこの高原の谷あいの南側に境を接する、なだらかな山々です。なだらかといっても実際はこちら側だけで、山と山の間、あるいは向うの平地のほうは、険しい岩山や峰々、峡谷、灰色の岩と緑の森、苔むした斜面などが目をみはるばかりに続き、まるで、^{ティタン}巨神ができるだけ狭い場所^{ティタン}で、天地創造の予行演習でもしたかのようなのです。もし巨神がいたとしたら、この地方もその住みかだったに違いありません。

浅間山は今も非常に活発です。でもありがたいこと

に、浅間山が かつては よく楽しんだ という 遊びに、まだ お目にかかったことは ありません。南の斜面を、大きいものは直径 30メートルもある丸石で埋めつくす、という遊びなのですから。1783年、かつてないほどの恐ろしい噴火に、大日本帝国は 6週間、土台からゆさぶられ続けたといひます。当時の文人が記したところによると、「山はその頂からふもとに至るまで火に包まれ」、溶岩と泥と岩と灰(100キロ以上離れたところでも5センチ積ったそうです)を休みなくはき出し、一方、噴火のとどろきと噴煙は天にも届くかと思われたということです。50以上の村が滅び、谷間は石でふちまで埋まりました。この高原の平地もかつては豊かな米の産地だったのに、厚さ1メートルを越える固い岩滓の層におおわれ、このあたりをうるおしていた川は横へそれてしまいました。失われた人命は数えきれません。溶岩は北の斜面を16時間のうちに50キロ近く流れ、今日に至るまで、黒い傷あととなって残っています。この辺にはあまり人も住まず、2~3の村落がきわめて貧しいのも不思議ではありません。何でも呑み込んでしまふ、こんな怪物のそばに、誰が いい家を建てたりするでしょうか。誰が、何もかも破壊するような息のかかるところ

へ近づいてゆくでしょうか。この災いをすべてもたらしたのが美しい浅間山だったということもここへ来て初めて知りました。そうであれば、浅間の山腹にこれほど近いところに落ち着こうという勇気が、はたしてあったかどうか疑問です。私たちが家を建てたあたりの標高では、間にある小さな丘のおかげで、また噴火が起ったとしても全く安全だということです。でもやはり、私たちが生きている間は無事でありますようにと祈りたい気持ちになります。

入山峠へ向って平地を横切ってゆくと、結局は徒労に終わったものの、耕作できそうな土地を捜そうというので、あちこちに作られた切りどおしに、岩滓の層をはっきりと見ることができました。美しい平地はいつも、いわば山の外庭とでもいうか、野生の花が咲き乱れるほかは何もない浅間の庭でしかないのです。

アスターやアキノキンソウなどが咲く中をひざまで埋まりながら平地を横切ってゆくと、草でおおわれた斜面が、まるで手でやさしくなでつけたような形に、空と境を接しているのが望める場所に出ました。あちこちに突き出した岩は、俗世間で自分を取りまいてる安楽や心地よさに抵抗する苦行者を思わせませす。そのなかに、山

頂近くに突き出している、とても大きな四角い花こう岩の岩があります。まん中に説教者の立つような場所があるので、私たち外国人は「説教壇の岩」と呼んでいます。その岩のふもとを回り、もうひとつ峠を越え、そして和美峠の尾根へ出たのです。ここからはこの世のものとも思えぬほど美しい岩場を見おろすことができます。その間をぬうように深く切れこんだ道がくねくねと続き、高山峠を経てその向うの平地まで伸びているのです。ここに立って覚える驚きは、この景色独自の特徴かもしれません。ちょっとした山登りをしてから、斜面をぶらぶらと登ってゆくと、あと数メートルほどで草深い尾根に出たようにみえます。岩場や山々はもう過ぎてきたし、足もとの芝は柔らかい——

「この小山でしばらく休んだら、家へ帰りましょう。もう見るべきものもなさそうだし、ここも浅間山のふもとの丘と同じなもの」

と独り言。

そうこうするうち、緑の尾根に出ます。するとどうでしょう。新しい魔法の世界が、足もとはるかに広がり、驚きに目を見はらせます。あずまやにお城、天主閣に控

え壁、そびえ立つ大聖堂に深いお堀——そんな世界が。あの鬼戸から今にもアーサー王の廷臣たちが、馬を駆り、金色に輝く一団となって走り出てくるやもしれません。アーサー王の妃は、高い胸壁から身をのりだして、許されぬ恋の炎をかきたてる、あの騎士が一瞥を投げしてくれるのを心待ちにしている。あの峡谷はどれほど深いのでしょうか。そこでは大蛇がとぐろを巻いているかも知れない。遠くに見える尖塔はどれほど高いのでしょうか。まるで金色のもやにとけてゆくよう。あそこでは王が歩き回り、妖精の妹、モーガン・ル・フェイと共に夢見心地で何時間も時を過ごしているかも知れない。芝は緑色のびろうどのひだのように城の下まで続く。からっぽの堀には、はね橋がかかったまま。金色の夕日が人気のないとりでに溢れんばかりにふり注ぐ。モリバトだけが、妃の部屋ののき先をぐるぐると飛び回る。足音も叫び声も聞こえない。聞こえるものとしては、城の下を回る曲りくねった、暗い道、深く切れこんでいて、ここからはほとんど見えないその道を、荷をたくさん積んだ馬を追いながら登ってゆく、青い上着にわらじ姿の男の声と足音だけ。

ここは日本の中部の山々のふところ。大きな城は名

もない岩。アーサー王の要塞は自然の戯れの忘れもの。私は夢をみている。ここに何時間も座ったまま、夢の中でまざまな世界を織りませで——東と西、昔と今、伝説と真実の世界を。

そうするうちに、まわりに仲間たちが集ってきて、やっと登れるくらいの、狭い岩場にまつわる不思議な話をしたり、この花こう岩の迷路に迷いこんでしまったらしい二人の仲間を呼んだりしています。やがてずっと下の方にけし粒くらい小さな二人を見つけました。こちらに向かって手を振っています。仲間うちでは、しょっちゅう道に迷う二人なのです。ですから、好きなだけ歩き回らせておこうと、こちらはこちらで笑いながら、彼らに背を向け、駆け足で遠のいてゆく夕日のすそにしがみついで、平地を横切り家路をたどりました。

何といても心地よいのは、夕暮れ時の野をゆっくりと歩いて帰ること。草の根もととはすっかり黄昏に包まれているのに、頭のあたりにはまだ最後の光がほのかに残り、うす紫のアスターや白いオオアマナの花が雲の上で揺れているかのよう。何百という月見草はうす黄金色の顔を西の方へ向けています。それは一日が終ったというしるし。暑い日中は眠っている花なので、おひるごろここを通った

時には、どの花も日の光をあびて閉じていました。でも、日が暮れてひんやりとしてきた今、花はすっかり開き、無数の星のように一面に咲き乱れています。その向うには霧に包まれた山々と、紫に染まったおだやかな空。根もとには背の低い草がからみあって、露に濡れています。

「いとしいものたち、あなたがたの上に神の平安あれ、ものみなすべてに神の平安あれ！」

はるか遠く、平地が急に南へ折れるあたり、小諸という小さな町があります。工業に力を入れている町で、まわりにはさほど興味をひくものもなく、私たちのこの古ぼけた村——家はどこもくずれかけていて、障子はぼろぼろ、犬を連れて通ると、子供や猫がちりちりにおそまつな家へ逃げこむ、そんな村よりも、はるかに趣に乏しい町です。

貧しい軽井沢もかつては中山道の宿場町で、どの大名も京都から江戸へ下る途中、必ず通らなければならぬ要地でした。今では、この辺へ来るのは山越えのお遍路さんと、私たちのようなもの好きな外国人だけです。鉄道が3キロ余りそれているので、町はたいそう貧しくなり、公衆浴場すらないので、今年、私たちが

やって来てからというもの、うちで利用する肉屋、米屋、洗濯屋がことごとく村に看板を出して、英国公使館御用達と書きたてました。この町は多くのカナダ人宣教師のお気に入り地でもあります。私たち自身と私たちの友人に加えて、宣教師たちも彼らをひいきにしてくれて、わずかでも町に繁栄が戻ってくればよいと思います。

けれども小諸は全く違えます。この町は鉄道の路線上にあり、よい宿屋もあり、この地方一帯で使われる鞍、道具類、二輪馬車などを作って、栄えているのです。

先日、小諸へ行ったのは、逗留するのが目的ではなく、珍しい仏教の僧院を訪ねるためでした。僧院は、川にかぶさるように突き出した山の奥深くにあります。恥ずかしい話ですが、その川の名前を聞くのを忘れました。小諸を出ると、道は、しばらくの間水田の間を抜けて、日本に来て以来一度も足を踏み入れたことがないほど暑い土地を越えてゆきます。田は、ちょうど歩けるくらいの幅のあせ道で区切られています。あせのあちこちに、ちっほけな溝がまにあわせに掘ってあり、スコップの背でたたいて形をつけては、水が田から田へ流れ落ちてゆくようになっています。というのは、水田を台地に作らなくては

ならぬので、水がひとつの田をすっかりうるおしたらすぐに、30センチばかり下の田へ流れ込んで同じことを繰り返して、また次の田へ、というふうにして、すべての稲に水が行きわたるようにするためです。この時期、あせ道は、あおあおとしていて、そこここには一本、また一本と、血のように赤い百合の花が何かの合図のように揺れています。その色は強烈な緋色。炎に似たところも感じられます。ほかにはどんな色も、たとえ白ささえも認められないほど遠くからでも、この緋色だけは見えるからです。

私はかごを従えてきていましたので、例によって、他の人たちよりもずっと先を走っていました。みんな歩くことにするなんて、こんな暑い日には、それは大まちがいというものです。まもなく、私の乗ったかごはほこりっほい道から、いやな臭いのする水田の中を走る道へそれました(ここで農業を成功させようとする、それは——こんな言葉を使ってごめんなさい——ひどく臭くならざるをえないのです)。それから、かなり水かさを増した川を渡って、岩山の北側へ抜ける道へ入りました。森の木陰と涼しさは、どんなにありがたかったことでしょう! かごかきたちの歩調は、もっと涼しい日よりも速いようです。連れの仲間

たちが、まだ、斜面をよじ登り悪戦苦闘しているころ、私たちは、難儀なところはとうに過ぎて、尾根づたいに走っていました。

道を再びくだり始めたのは ちょうど正午でした。川の音のするほうへ折れると（流れそのものは見えませんでしたから）、ナラの木が生い茂った短い細道のつきあたりに、僧院のくすんだ赤い門が見えました。もうしばらくくたてゆくと、灰色の石の中庭に入りました。三方に古い建物があって、正面には、両側にまっすぐにそびえる岩の間に平屋根が渡してありました。ここはウミツバメの巣のように、ちょうど岩の裂け目に位置しているのです。日の光もここまでは届きません。頭上にも背後にも午後の暑い日ざしが照りつけているというのに。目の前には壁のような岩山がどこまでも続き、その間にはさまれて、はるかかなた、川向うの土地は、まひるの輝きに包まれ、燃えるような暑さの中を泳いでいるようでした。

家に、紫式部の絵があります。紫式部は今から800年ほど前、皇后の命令で書くことになっていた物語の構想を練るために、ちょうどこんなふうな場所へひきこもったのでした。彼女が岩山にはさまれた寺の、地

上はるかに高い露台に出て、ここで私たちが遠くの川を眺めているように琵琶湖を見おろしながら、一晩中座っていたのは、8月、満月の光が冴えわたる夜のことでした。その寺がこのようだったとしたら、彼女の心にみなぎる靈感、その靈感の力を得て物語の主筋をなす挿話を書きつづり仏教の經典の裏側をすっかり埋めつくしたというのも不思議だとは思えません。翌日、聖の怒りが鎮まったころ、式部は自分のしたこと気づきました。その後、全巻を写経しなおし、その償いをしたのでした。

ここ、小諸の岩山の僧院では、すべてが静まりかえっています。光は光ではなく、澄みきった影、一樣なうす暗がり——そこでは、あらゆるものが完全な姿でとらえられる、それでもどれひとつとして、疲れた目にきわだってまぶしすぎるものはないので。あたりの空気がかもしだす、はるかに隔てられた感じ、おたやかな平和の感じをお伝えすることはとうていできません。日ざしの強い外界からここへやってくると、たとえていうなら、身を焦がし枯れ果てる、激しい恋の情熱から、あらゆるものへ向けられる、母親の心のやさしさへ、未来永劫、不滅の運命を

背負わなければならぬ云々が、いまだその不滅の烙印を押し付けていない、生れ出する前のあけぼのへと心が向かってゆくような気がします。

あらゆるものが安らぎに満ちています。たとえば、褐色の大地——歩を進めると、まるでその足がどんなに疲れているかを知っているかのよう、そっとちりが落ちる。はるかに平地を見おろし流れの音を下に聞く、小さな、固い裂け目に生えることを選んだ、世捨て人のような木々。灰色の岩山。切り立った岩がほんの少しづつけずられてできた道。その岩は下を流れる川床まで、目もくらむばかりに落ち込んでいます。人の目には見えない獲物を追って、褐色の翼の隼がその谷底めがけて巣から石のように落ちてゆく——そのゆくえを追うことなど、とてもできそうにありません。狭い階段づたいに、底は闇に閉ざされて見えないほど深い割れ目のふちをめぐって、ごうごうした岩山に出ると目の前にはまた岩がたちよだかつて影をおとし、今、逝こうとする人をみとる歩哨のよう。それもみな安らぎに包まれているのです。

わずかな草の上に、顔を空に向け、手足もからだの下に折り曲げて横たわっている、気の毒な日本人がいま

した。年は28歳くらい。うすい木綿の着物を着ています。見開いた目には、まだ意識があるせいでしょう、苦しみの色が浮んでいます。彼は哀しげにうめき苦しみながらも、誰もが切に差しのべようとする助けを拒んで、首を横に振るのです。案内役をつとめていたお坊さんが説明してくれました。その人は自らすすんで悔い改めをし、誓約を果たしているのだそうです。食べ物にも飲み物にも手を触れず、八日八晩をここで過ごしているのです。まだ、あと二日、苦しまなくてはならないのですが、たぶんそれより先に死んでしまうでしょう。それが彼自身の望みなのです。してやれることは何もありません。そのままそっとしておいてやるほうがよいでしょう。

自分が知っている唯一の善に殉じようという、哀しくも勇気あるかた、あなたは、今、ほんとうに安らいでいらっしゃるのでしょうか。神は御自身が求められた以上のことも、こうしてあなたが捧げたからといって、それを責めるようなかたではありません。

訳者あとがき

ここに紹介したのは、フレーザー夫人が書きつづった42章のうち、伊香保、軽井沢を題材とした6章だけです。

およそ100年ほど前、フレーザー夫人の見た軽井沢と今の軽井沢とはだいぶ違うはずです。それでも、ここに描かれているのは現在とはおよそかけはなれた古きよき時代の軽井沢などではありません。当時は都会でもそうでしょうが、とくに田舎に住む日本人にとって、「外人」はまだものめずらしく、夫人もいたるところで人々の無遠慮な視線に出会ったに相違ありません。にもかかわらず、この文章を読めばわかるように、夫人は人々のこと、自然のことを、偏見に惑わされることなく、率直に、誠実に、あたたかい目をもって見つめていたのです。自分の目で見、肌で感じたことをありのままに表し、しかもうわべだけの描写に終らせなかったのは、夫人の勇氣と洞察力のなせるわざでしょう。ここには時を経ても変らぬ真実、「霧のかなたにある真実」がちりばめられています。

1980年夏、軽井沢の午後、フランネルのドレスをまとった夫人がそぞろ歩きを楽しんだら、やはりあのころと同じように、「なつかしい私の故国」と呼んでくれるにちがいありません。夫人が二つの故国、英国と日本の間にかけた橋が、七夕の夜のあのかささぎのかけ橋のようにいつまでも生きつづけることを祈りつづ。

筆をおくにあたって、この本を出すきっかけを与えて下さった、上智大学のピーター・ミルワード神父様、当時のことをいろいろ調べたり、拙い訳文を読んだり、気長におつきあい下さった親松ヒロオさん、何かと協力して下さいました森三治子さん、そして、本文の清書をして下さった半谷征子さんに心からお礼を申し上げます。

瀧澤恵美子

1980年7月 東京にて

A Diplomatist's Wife in Japan
— Letters from Home to Home —
By
Mrs. Hugh Fraser
Hutchinson & Co., London
1904

霧と幻

1980 © Urokogataya

1980年8月7日 第1刷発行

著者 M.C.フレーザー

訳者 瀧澤恵美子

書き文字 半谷征子

発行者 親松博夫

発行所 鱗形屋

群馬県吾妻郡嬬恋村大字鎌原

字鬼の泉水1978の261

印刷 成徳印刷 製本 中村製本

制作協力 (株)島出版 編集部

〒160 東京都新宿区坂町26 山栄ビル

万一落丁・乱丁の場合はお取替え致します

定価 1,200円

